本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

世界婦人

女子の高等教育

安部磯雄

女子に高等教育を授くるの可否に就きて種々議論をする人もある樣ですが、これは隨分つまらないことではないかと思ひます。教育は人間の爲に此上もない寳であつて、これがなければ人間としての價値はないのです、寳が多過ぎて困るといふことがない以上は教育が有り過ぎて害があるといふことがあらう筈はありません。昔から小人珠を抱いて罪ありといふことがある如く、教育のある爲に却て自分の身を誤る樣なこともありますが、これは全く例外であつて、決して多くの塲合に當てはめることは出來ません。男女に限らず教育は出來得るだけ高等にやらねばならぬといふのが動かすべからざる原則であらうと思ひます

教育の程度には際限がない筈ですが、玆に已むを得ぬ制限が二つあるのです。一は經濟上のことで、一つは能力上のことであります。相當の資產もないのに子女に高等教育を授けんとするは勿論宜しきことゝは思はれません、然しこれは決して女子のみに限るのではなくて男子にも言ふべきことです。父兄が借金までして子弟の學資を造るといふのは考へもので、これは恰も危險なる事業に投資するのと大差はないです。故に相當の資產がないために女子に高等教育を與へないと言ふのであれば、充分に理窟はありますけれども、女子には高等教育の必要がないと論ずるのは實に愚の至です。一國として考へても、經濟に餘裕がなければ女子の爲に高等教育の設備が出來ないのですから仕方がありません。貧乏世帶である間は男子の方に多く教育上の便宜を與ふるのが適當でしよう、目下の社會組織では男子が多く社會の表面に立つて仕事をして居りますから、先づ彼等に高等教育を授くるのが適當の順序です。然し經濟さへ許せば女子の高等教育に反對する理由が何處にありますか、故に女子高等教育問題は多く經濟上の問題に依るのであつて、經濟さへ許せば直に解釋せらるゝ所の問題です。されば財產に餘裕ある人が其娘に高等教育を授くるのを躊躇するのは實に愚の至りと言はねばなりません

女子の腦力は男子の腦力の如くでないから、高等教育を授くるのは不必要だといふ議論もありますが、これも全く取るに足らざる議論です。若し平均して考へたならば女子の腦力は男子の其に劣つて居りましよう。然し世には男子に優る所の學才を有して居る女子が決して少くないですから、此等の女子の爲に相當の設備を爲すのは國家が爲すべきことではありますまいが、腦力の制限と言へば男子にもあるのです、中等教育を受くる所の學生の幾分が果して、高等教育をも受けるに至るかと言へば僅に其一割か二割に過ぎますまい。勿論彼等の中には學資のなきため高等教育を授くることが出來ないものもあるでしようが、其多分は腦力の不足に因るのでしよう。さすれば男子の爲に設くる高等教育制度は單に小數の人々に其恩惠を及ぼすに過ぎないのです女子に高等教育を授くるの可否を論ずるに當りても、決して女子全體の腦力如何を研究するの必要はありません、彼等の中には必ず男子に劣らぬ程の能力を有するものがあるのですから、其人々の爲に高等教育の設備を爲すのが適當であらうと思ひます。一個人として考へても、學才の乏しき子女に高等教育を授くるの必要はありませんが學才さへあらば出來得るだけ高尙に教育するのが至當であると思ひます

○本號要目

△女子の高等教育……安部磯雄
△人間錄……白衣人
△杜翁と社會主義……記者譯
△トルストイの抗議……海外時事
△女優問題……記者
△獨逸女子高等教育……記者
△カル●マルクス……石川旭山
△空理光（二）……南無百南無十譯人
△魔（ホーパッサン）……二葉庵覺非
△放浪（ゴーリキイ）……咫折生
△「虛無の靈光」序……石川三四郎
△谷中村民の訴願……記者
△心影……女學生
△我が庭の秋（長詩）……楽風女
△秋十句（短句）……司笑
△汝理論よ（長詩）……孤舟

人間錄（三）

白衣人

△男女は人性の兩極也。男性ならぬ男性の女性ならぬ女性と、相混亂し雜沓し離合し、更に狂奔し奮戰するの塲を、世に名づけて『文明の社會』と謂へり

△人、權利を主張するのとき、義務自ら來る、權利と義務と俱に共に其廢語と成れるのとき、人は稍や康安の影に接するを得可し

△權利と義務とを打て一丸としそを『責任』と呼ぶ。

△「責任」は其意識界を脫離して始めて眞の面目あり。此境を「善」と呼ぶ。

△「善」は敎ふるものに非ず、說き得るものに非ず、水の低きに就くが如く、人自ら然るとき其本然の光を發揮するもの也。

△「善」は意志の上に立脚するものに非ず。實に人間感情の自然也。生物が自系統の破壞を恐るゝの感情は善の根元也。

△消極的に人力の浪費を、積極的に其惡用を共に爲さゝる者は「人」たるに庶幾し。

△戀に醉へるは其姿醜く、も內に甘し、樂し。神に醉へるは其姿淸くも內は寂し、光彩なし、智に醉へるは無趣味、殺風景なりとは言へ、勇ましからずや、詩に醉ふは悲愁堪へ難からんも爆として華光あり秋星の如し。若し夫れ生に醉ふに至ては人の至幸也。和樂玆にあり平凡なりと雖も誰か之を排せむ。

△戀愛、信仰、智慧、詩歌是等の總てに反面したるの時、人は遂に自から生くる能はず、而かも彼れに死を招くの勇なく、自ら殺すの興懷を要請する能はず、闇として閑の如く、空乎として無風の如し。

△人は或意味に於て都て賣品也、既に賣り物也、是に華を飾るは決して責む可き事に非ず。之を世界の商業道德に聽け「レッテル」にして彩らさるものありや、或は形の上に、或は澤の上に、

△此の如くして主義は一種の商標也。流派は陳列棚也。

△一列二列或ては三列、陳列されたる賣品は先づ缺無きものより賣れ初む。何れ直段は符帖の上に明らかなる可し。

人ありて能く慚愧することを知らば是れ調逆し易し、良馬が鞭つが如し

我が庭の秋

楽風女

夕風は、そよと立ちて、
秋來ぬと、聲は聞ゆ。
鳶舞いて、遠く去りて、
跡も無く、み空は高し。
樹枝高く、攀ぢては登る、
葡萄蔓、風にぞ頭垂る。
芙蓉の花、白く淸く、
繁茂る、黄葉に照り映ふ。
花英、薄くれないの、
唯一輪、幽かに輝く。

秋十句

司笑

里の子の栗むいて居るゐふなさよ
明月の軒に薹打つおんなかな
雁の聲みやこが兄のうはさかな
物おもふ夕べや雁の聲たかし
母と子の質素ぐらしや菊の花
日は山に暮れ行く村や砧打つ
日暮れて還へる田甫や雁のこえ
掛茶屋に馬いなゝくや龍田姫
初紅葉、前に小さき祠かな
交代の前哨さゝやく虫の聲

瞋火の熾然たるは世間の財を燒く
惡口の熾然たるは七聖の財を燒く

女子大に讀むべく男子盛んに讀まざる可からず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

杜翁と社會主義

「第三面の記事を參照せざれば意味通せざる可し」

英國「勞働指導者」所載　ペルリス氏論文

吾人は今日、尙ほ全世界に亘りて一大警鐘の鳴り響くを聞く、素より吾人の立場より見れば、トルストイは遙かに岐路に逸れ走りし觀ありと雖も、彼が放射する新英なる閃光に接する毎に、吾人は自ら歡喜の溢るゝを禁ぜざる也、吾人は彼が絶呼して『予を捕へよ、無幸なる無力なる吾が學徒等を捕ふるを止めよ、予を捕へよ』、予は汝等を詐欺、殺人に日を送る無頼漢として侮辱することを斷じて止めざるべければ也』と言へるを聞きて、如何ぞ能く此老大人の熱誠を疑ふことを得ん、若し尙ほ之をしも疑はんか、吾人は却て自ら剛復邪曲の罵を免れざらん『無頼漢』等は杜翁の捕縛を斷行する能はざりき、蓋し杜翁の言を流布する新聞記者を軟化せしむるは寧ろ更に捷徑なれば也、されど時運は進みぬ、封鎖の門は開けて自由の通路は發見せられたり、感謝す、ストリピンと其の親切に、トルストイは今や全世界に對して口を開けるなり

敬虔なる社會主義者は例外なれど、今より十年前には、露國内及び同國以外の多數の社會主義は、彼を目するに危險なる退却者、酩酊せる神秘家を以てしたり、予は是等多數者の感想か過誤失敗に歸せしとを歡喜する者也、世人が期の如き人と面々相對し、其偉大なる人格のみならず、其靄々たる家庭の和樂に直接して我が信仰を確實にする時は實に大切なる事件なり。

更に明察を要するものあり、他無し、彼の弱點が露國二時代に亘れる擾亂の結果として、國民不健全なる發達の結果として免る可らざる產物なると、而も彼の剛堅なる方面に於ては實に他の露國人に曾て見ざりし大感情と眞面目とを發揮せしものなると是なり。

單に其風貌に於ても、トルストイは巨大なる價値を存すべし、彼が藝術家としての名聲は世既に定評あり、而して彼か八十歲の高齡にありながら、尙ほミルトン的の無倦無息の精力を以て高談放議する政治論は其强大なる勢力を英國工場と米國未墾地とに有す、抑も是れ何の所ぞや、首として、彼の暴力、押領、迷信を基礎とせる制度に對する剝々るが如き評論——勞働者の普通生活の深き知識を以てせる猛烈なる批評、非常なる誠實と直情、比喩的諷刺的物語の創作に於ける東洋的才能——に基因するものと言ふを得べし、ゾラのは報導者の寫實主義なりしが、斯人のは豫言者の寫實主義なりき、されど之に止まらず、一箇の信仰の上に立ち、一箇の人生觀の上に立ち、現世と相對して自我を保持し發展せる人には必ずや大なる引力神秘力を存するものなり

社會主義は勝利すべき尙ほ大なる世界を有す、社會主義は伯林にも巴里にも高國にも低地にも、モウコウにも、シカゴにも、遂にエルサレムにも北京にも適合せざる可らず、社會主義は破壞すると同時に建設す社會主義は舊宗教を失ひ若くは失ひつゝある幾千萬の人を鼓舞作興す、社會主義は胃腑を充すと同時に、ハートと心を充さゞる可らず、全未來は社會主義に屬す、自由主義が與かりし如く單に過渡期に限るに非ず

世に狹義の社會主義者及び廣義の社會主義者——單に經濟的綱領を以て滿足する者及び人生一切の問題に光明を求むる者——の二種あり、されど人民のハートは唯だ吾人が彼等の深き全本性に糧を與ふる時にのみ奮興するもの也、中等階級、富豪政治的修飾は吾人の希求する新共和政治に對して決して施されざるべし、三百三十人の露國革命黨員は今年前半期に死刑を執行せられたり、其悲絶壯絶なる最後の瞬間に於て此等の殉難者を激むるものは何ぞや、紙に書きたる綱領か、否らず、唯だ自由と正義とに對する渴ける如き要求にあり、吾人は吾が平民の爲にヨリ大なる要求を懷くまではヨリ速かに前進する能はず、唯だ吾人は彼等の眞實なる生活に接觸するに依てのみ眞要求を了得す。

若し予の解釋にして正當ならんか、此の如きは實に勞働黨の精神なり、世界を以て其領域となし、全歷史を以て其案內となし同時に新なる技術と思想とに對して門戶を開放し、而も其最も心を傾くるは、貧者に福音を宣傳する所の若き宗教にあり、トルストイは實質と方式との兩方に於て斯る模範を吾人に與ふ、素より彼にも多くの偏見を存す、然れども彼の單純と直進、彼が仁愛と理性と勞働とに對する熱誠、彼が一切の專制々度と保守主義とに對する憎惡心等は現時に於る世界最善なる感化力の一也。

●杜翁と新聞紙

杜翁の抗議が一度世に發表せらるゝや、世論俄かに起り、翁の宣言を揭載せる新聞紙は續々所罰せられ『スロウォ』は二千ルーブル（日本は千餘圓）『ウエチエル』『アゴヂス』は各一千ルーブルの罰金を科せられ『イウニイ、ヴエスツニツク』の記者は禁錮に處せられ印刷所は閉鎖を命ぜられ、其他六種の新聞紙は或は沒收、或は罰金に處せられたり、茲に滑稽なる一事あり、皇帝の懺悔僧長老ジヨンの祈禱文是なり、左の如し

『天の父よ、汝が聖なる教會の祈願の爲に露國に平和を與へ給へ、汝が不幸なる人民の爲に、擾亂と革命とを絕止せしめ給へ、明かに邪まにして悔ゐ改めざるレオトルストイと彼の學徒とを總て地上より攘い去り給へ』

是れ世に大權威ある祈禱なり、時間と空間とを絕し盡して珍無類の文句と言ふべし

●女優問題

記者

今は事舊りたれど、女優問題が一時世論の中心となりたるとは讀者の知らるゝ如くに候、一體此の如き事は吾等の眼より見れば何等の問題とも相成らず、高等教育を受けたる女學生が俳優を志願せりとて何の不思議も有之間敷候、假令俳優と稱する事業が賤しむべきものなりとするも、堂々たる高等教育ある男子が資本家と稱する勞働强奪者の幇間となり小使となり犬となり馬となる今日の社會に候得ば、少しも異様の感は起らず候、世には『醜業婦』の『賣淫婦』のと申す熟語が廣く流行致し候得共、天下の男子は滔々として皆『醜業男』『賣節漢』に候はずや、由來世人の女子を遇する常に餘りに酷薄に候、演劇は藝術中の藝術とも申すべく、俳優は藝術家中の藝術家とも申すべきものに候、高等教育ある女子諸君が世の批評をも恐れず、奮然此業に身を投せられたるは吾等の双手を擧げて賛同する處に候、世人は女優志願者の前途を憂へて其墮落、中折を戒められ候、其注意親切は素より聞くべしと雖も、墮落と中折とは決して女子のみの弊には無之候、吾等は、今回の女優志願者を以て久しく失はれたる女子の天職の一部を發揮せんとするものとして先づ其勇氣ある發心を慶賀せざるを得ざる者に候、女優志願者諸君、希くは、藝術の爲め、女子の天職の爲めに自重加餐せよ。

●『虛無の靈光』の禁止

前號に豫告せる石川三四郎氏著『虛無の靈光』は如何なる意味ありてか政府當局の忌諱に觸れ、發賣禁止の厄命にも接せず、無沙汰の儘にて一部も殘らず差押へられ候、本社には未だ何等の御沙汰も無けれど物品は多分神田警察署の虐待を受け居ると察し申候、其當時の諸新聞にも報ぜられたる如く、本書の內容は最も健全なる宗敎論に充され候得共、著者が社會主義者なると、書名に『虛無』の二字を存するとは、蓋し當局者の危惧を買いたる一原因なるべし、眞に滑稽千萬の儀に候、曾て露國政府は『ダイナミツクス』（力學）と稱する書籍を『ダイナマイト』と誤りて稅關にて差押へ歐洲諸國の大笑柄となりたる由、露國の專制主義を學ばんとする日本政府が『虛無』の二字に驚く位のとは別に驚くにも足るまじく候。

心影

女學生

雨しと〳〵と、小止みも無き木の下蔭に、身に染む杜鵑の一聲、二聲、寂々の雨の夜。重苦るしき懷の夢にのみおそはれてわりし昔の冥想を繰り返し、繰り返し、身にあまる現在の痛みにかきくらまさる。

矛盾の叫びをわざと控へて、青春の色美はしき艶なる笑をせんものといかに憤めども力にせし可愛の弟が死に働哭したる身は今また刻々に迫り來る壓制結婚否々購買結婚を、いなむべからざる人情のつなによせてわはれ落莫の人生に恨を告げんとす。

古き社會の習慣と頑固一偏なる家庭との間に不孝者として狂妄として、注目されざるべからざる身やいかに。

これ唯單に過渡時代の犧牲物とのみ目すべきや。

一度は華麗の彼方、物憂き空氣をなつかしみまたは蒼々たる大洋に永遠の自我を認識し。雲隱れする陰欝の月となり、爛慢の花をさそううてなとなり。果ては色艶もなき世界に再び懷疑の子として、さすらはむとすさはれ、微妙なる觀念は、不合理にも遷り行く時代に刺激されナチユラルの本能性は眞理の白き刄に眼さめんとす。

立て人の子、立ちて汝のなすべき勤めを取れ物質階級がいのに多くの人才を唯スターと共に泣かせつゝあるかよ、あ憂ふべき血の海の二十世記の前途よ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

トルストイの抗議

「予を捕へよ、予は書くことを止めざるべし」

露國政府がトルストイ學徒に對して苛酷なる迫害を加へたるとは久しき以前の事實なるが、政府が其隱蔽に努めたる爲め、事實は多く世に傳はらざりしが、今やトルストイの抗議に依りて此秘密は全世界に曝露せられたり、其抗議は八月一日に公にせられしが、實に次の如き強烈なる宣言を以て成るものなりき。

一九〇八年五月七日、ノヴゴロドに住める知人ウラヂミル●モロチニコフは、予の著書を其家中に貯へ置きたりとの理由を以て捕縛せられ、而して十二ケ月の禁錮を宣告せられたり、予は之を聞きたるを以て、左の如き宣言を「ルウス」新聞に送りたり。

「官吏等は再び代りてノヴゴロドに關係せり、而して自ら裁判官と稱する人諸は、不當知友間に特長なるゝウラヂミル●モロチニコフと云ふ人を一年の禁錮に處し、又、其理由は嘗て彼が予の著書を所持し、之を讀みたしと乞ふ者に與へたりと云ふに在り、然り而して彼は此點に於て事件起り、予の著書を頒布せりとの作によりて苦しめられ罰せられたる者多し、而して其頒布の主なる原因たるのみならず此等苦痛の存在の首要原因たる予は、尙は平和を與へらるゝ也。

「若し頒布者を如何に罰し禁錮するも、措置に對する公衆の同情（若し同情ありとすれば）は決して減少すべからず、何んとなれば、予は露國內及び外國に於て發行する多くの書冊を所有すればなり也、而し、其著者にして其の頒布者たる予は世に生存する間は決して書くことと頒布することを止めざれば也、而して又、其頒布者を迫害すること多ければ、從て拙著を研究する者益々增加すべし、されば予の事業に關係する人民を撲滅するの合理的手段は唯だ予を撲滅するの一事あるのみなること明白なり、予を不安にして却て頒布者を苦しむる如きは、厭ふべき不正のみならず、驚くべき痴愚といふべき也。

予聞く、某大臣は余の運動を防止せんが爲に、余の友を苦しむるの計劃を案出せりと、假令事實にして眞實なりとするも、是れ到底其目的を達する能はざる計劃なり、蓋し、余が友の難苦は余に苦痛を與ふべしと雖も、而も余は余の生存中に斷じて余の活動を停止すること能はざれば也、余は其活動に於て外形的目標を求めず、唯だ余の充足せざるを得ざるその神靈の要求を充足するのみ、余は之を會得しぬ、之を會得して止むに止まれぬ也」

次でトルストイは、余の言を忘せば多くの人民を苦しむるに及ばず、唯一の本源たる余を處分せよ、余が八十年間の爲に嘗て自ら罪を免れんと望みしと思惟する勿れ」と記し、更に語を續けて曰く、二人の辯護士を以てモロチニコフに相談を勸告したれども彼は之を欲せず、彼が一九〇七年八月ノヴゴロドに宿泊中頒布の目的を以て所持せるは左の如き類のトルストイの著なり。

一　如何にせば勞働者は自由なるを得るか	六十二冊
一　汝殺す勿れ	十五冊
一　基督教と兵役	二十八冊
一　終末の始め、瑞典人への手紙、其他の文集	十冊
一　自ら反省せよ	六冊
一　自由主義者への手紙	六冊
一　ニコライ●パルキン	十冊

而して才判所は彼に城塞監獄一年間の禁錮を宣告したりと。

トルストイの宣言は極めて強硬峻嚴なり、夫の醜陋猥褻なる行動を敢てせる當局者の面目何處にかある、而も當局者は遂に一指をもトルストイの身體に觸るゝ能はず、嗚呼一個の老人トルストイは數百萬の軍隊を有する露國政府よりも偉大なる權威を有する也、此偉大なる靈光に浴する二十世紀の世界は幸多しと言はざるべけんや。

●獨逸に於ける女子高等教育

獨逸に於ける高等教育より女子を除外せよとは全國保守的新聞雜誌と保守的教育家の強硬に主張する所なりしが、事實は彼等の議論を顧みず、女子高等學校と師範學校の數は生徒の增加と共に益々の增加を來せり、女子高等學校反對の際の猛烈なりしは僅かに數年前の事なりしが、今や獨逸各地に於て斯る學校の設立を見ざる所稀なるの有樣となりぬ、先年以前に於ては女子高等教育の爲に設立せられしもの二百十二校に過ぎざりしが、今日は三百校以上に增加したり。

一九〇二年には女子にして高等學校に通學するもの五萬一千八人なりしが、一九〇六年には七萬一千人となれり、僅かに二年間に一萬八千の增加を見たる也、今日に至りては、高等學校の女學生の數少くとも二十五萬以上なるべしと稱せらる。

是等の學校に出勤する教師は、一九〇三年に男子千二百三十八人、女子千九百二十人なりき、而して其後に於ける男教師の增加數は僅に二百人に過ぎざるに女教師の增加數は實に七百人以上なりといふ。

尙ほ茲に記すべきものあり、即ち上の學校は皆是れ公立の學校に屬するものなれば之に加ふるに尙ほ六百七十五の私立女子高等學校あり、八萬五千人の女生徒を有す、而して是等の私立女學校に於ては漸く男教師に代ふるに女教師を以てしつゝあり。

●伯林の婦人勞働者

伯林にある「婦人保護協會」は全都下に於ける婦人勞働者の狀態を研究せんが爲に委員を選任せしが、委員等は、全協會が爲し得る最良なる事業の一として女工宿泊所の建設を提唱したり、尙ほ其調査の結果として報ずる所によれば、今、伯林に十萬人の女工あり、內一萬人は十六才以下の少女にして九萬人は十六才以上の婦人なり、而して其內五萬人は都下に家庭を有せざるが故に他人と共に或は下宿し或は間借りをする者なり、更に委員は報告して曰く、概して言へば、彼等の寓居の狀態には一も滿足すべき點なるを見ず、其不衛生的なる、甚だしきは十六才未滿の少女の多くは何等の保護監督も無く、他人と共に寢ね居るなりと。

●印度婦人團体

印度カルカッタに於ては一の婦人團体組織せられたり、其目的は印度に於ける婦人の發展に對して盡ふに在り、其標語は「印度人民の爲に印度を」といふなり「[illegible]」と稱する印度語新聞は其運動の中堅を爲し「毛[illegible]」する英人の支配に對して反抗を樹るに際して婦人自ら其運動の一部を分擔せんことを期す。

●和蘭婦人の訴願

和蘭の獨立たる婦人等はルーマニア政府の虐待を受けつゝある猶太人の爲に利益ある仲裁の勞を執られんことを和蘭皇后に訴願し、而して皇后に請ふに、ルーマニア政府に交渉し、又、全國のエリザベス女皇たるカルメン●シルヴァを説破せられんことを以てせり、されど此等の婦人は未だ一時的の[illegible]ものに[illegible]猶太婦人の身并びに小兒の運命は父兄の[illegible]に伴ふて日々に危急に趨きつゝありといふ。

山口孤劍君より（千葉監獄）

僕は堺兄等の才判の結果を聞いて慟哭しかつ噫僕は諸師父に等しき堺兄に背く大なるものである、これでは東京も火の消えたやうであらう、僕は相變らず獄で下駄の鼻緒をこしらへてゐる、書物などは殆ど讀むひまはない、こゝに來て「ノートルダム」を一冊讀んだばかり、何を言ふても夕食がすんで作業に移るまで僅か一時間位のあひだを利用するに過ぎない、其れに日曜も午前中はやはり仕事をせねばならぬから、僕の健康は依然たりだ、東京監獄では暫らく寢たが、こゝに來ては一日程休役して病床の人となつたばかり、監獄では死にたくない、どうか無事で出獄して、もう一度主義の爲に働いて見たい、幸德兄の病氣はどうかしら、同夫人も病氣とのこと、貧と戰ひ病と戰ひ、かくて尙ほ奮闘の道を行かむとする幸德兄をおもふと、僕は滿身の血管が一時に湧きたち弱き心の燃えたるのである、君、君等は詩と先哲の詠言があるなら我慢はできまいか、誰か洗心洞劄記と云ふ本を持つてゐる人はないだらうか、幸德兄、堺女史、堺夫人、小杉夫人、菅野女史、其他僕の知れる御近所の同志によろしく（九月二十四日[illegible]）

●篤志の女學生一名　世話したし

一と通りの學校教育ありて殊に英語の素養あり、文學好しく社會的傾向を有する女學生を一名世話したし、そして將來婦人問題の爲に盡さんとする志ある女學生を一名世話したし、社會主義の婦人雜誌の編輯を見習ひつゝ、勉學修養の機會及編輯を充分あり、衣食、住居其他必要の費用を給す、但し渡米旅費は自辨のこと、望みの御方は先づ自身の履歴を添へ申しこまれたし、手紙は成るべく英語にて認められたし。

Kiichi Kaneko,
Grand [illegible] U. S. A.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

我が家、我が村

（福山生）

前號の「世界婦人」に寄書したる拙著「虚無の靈光」は不幸にして無理なる發賣禁止處分を受けた、事情は當時の新聞紙にも報導してあつたが、未だ納本もせざる以前のことなれば、當局者は勿論内容の是非を知る筈無く、いかさま小生が社會主義の一兵卒なるを、書名に「虚無」の二字を挾めるさがなくも思慮に觸れたるものと察せらる、併し當局にして若し拙著を一讀せられたなら如何に感じたであらう、素より虚無とは革命思想の親子である、然れども生死が生物に必然の現象なる如く、虚無と革命とは人生に必然の思想欲求である。之を説く事に何の弊害があらう、尠も世に宗教と稱せらるゝものは皆な之を説くではないか、併し考へればマア嬉い事でもある、何か心に觸るる所があればこそ風聲鶴涙にも驚く樣な譯で、小生如き一兵卒の著作にも斯くまで怖れを懷くといふはヨクヨク内部に弱い所があるのであらう、思へばマア甚だ滑稽な譯さ、併し僕の身に取りては決して「滑稽」「譯さ」と澄しては居られぬ。第一に經濟上の大損害だ、第二に此著を公にしやうと思ひ立つた初志を押潰されて了つた、ソコで、セメても心やりに本誌の餘白を借りて、其の序文を掲載することにした。

（一）

此書は亡父十三回忌の紀念として親戚故舊に頒たんが爲めに編輯したのである。固より、財産無く、才智無く、學識無く、定まつた住家さへ持たぬ今日の我が身にとりては、親愛深き故人を紀念するにも、僅かに此みすぼらしき小冊子を世に出すが精一っぱいの事である。其れとても新に書き出すべき餘暇も無ければ、已れ昨年來巣鴨獄中幽囚の身であつた時の日誌中より、其の少許を摘錄したに過ぎない。

（二）

父は、予が廿歳の時、即ち今より十三年前の九月十五日六十二歳にして永遠の眠りに入つた。予の生家は武州の小都會なる本庄町といふを隔る北方十五町、利根河岸の一小村に在た。上州伊勢崎町と本庄町との間を通ずる縣道が、利根河を横斷する其處は即ち我が呱々の聲を揚げたる所、又我が慈父の簀を易へ給ひし所である。我が家は代々村の名主にして、又代々船の問屋（即ち今の運送店）であつた、村民の殆と全部は我家の業務に從ふ船乘（船頭）車引、馬丁であつた。啻に村内のみならず、二三里以内の近村内にも此業を以て渡世せる者が尠くなかつた。家業の大部分は利根の河流に據て江戸に往復し、種々なる貨物の運搬を爲すとき、車馬に據て上州鬼石町邊より秩父郡内各地まで貨物を運搬往復することであつた。殊に「御年貢米」を江戸に運搬するは最も責任重き、最も大なる事業であつて、從て我が家の最も名譽となせし所、又た最も威光を輝かせし所以であつた。而して我が家の一族が何れの時代にか江戸『御船役所』に一つの席を有するを常として居たが。予の伯祖父の兄は同所の『御船日付』といふ役であつた。予は素より是等の役が如何なる性質のものやら知らぬ。當時の事業が如何なる状態であつたか、勿論直接に見た譯では無い。唯だ予が六七歳の折に聞ける祖母が寢物談を今ま腦髓に記憶するに過ぎないのである。而も其の『御船日付』の話など、如何にも大そうらしく談られし樣今も鮮明と我が記憶にありて今更に可笑しく感ぜられるのである。

（三）

然るに明治維新となりて社會百般の面目は一新せられ、從て我が家の事業、我が家の地位には尠からぬ影響を齎らしたであらう。併し、我家の榮華は未だ決して衰えなかつた。我村も亦尚ほ昌へて居た。利根川の水が東に流るゝ内は口の干あがる心配は無い、とは我村人の確信であつた。越夜の金を使ふ可らずとは彼等が日常の道德であつた。彼等は比類無き樂天家であつた。

然るに何ぞ計らん、利根川よりも長大なる利根川よりも敏速なる、驚くべき運送機關が突然、洪水の如く彼等を襲ひ來らんとは。即ち明治十七年、人民數萬の間に上野高崎間の鐵道は交通を開始したのである。水上の運送は一夕に止みて、洋々たる利根川の水は空しく東に向て流るゝのである。

父は直ちに眼を轉じ、村人と共に此新方面に發展せんと欲して本庄町停車場に運送店を開始した。併し、素より未だ習練せざる新事業ではあり、且つは營業が俄かに二方に分れて父の注意は行屆かず、而して新事業は忽ちにして失敗に歸し、多大の負債を生じて閉店の巳む無きに至つた。哀れ新交通の新産業は斯くて我家と我村とを破壞し去つたのである。

（四）

父は根柢的の事業家と言はんよりは寧ろ靜かなる君子風の人であつた。吾等が物心を覺えし頃よりは、我家は隨分苦境に陷つて來たようであつた。併し保守的なる父は能く此難苦に處して少しも亂れなかつた。殊に此苦境にありながら、父の最も心を注がれたのは我等の教育であつた。次兄が十一二歳、予が八九歳の頃、父は吾等が爲に特に漢學の家庭教師を雇ふて四書五經、三字經、大統歌、抔といふ書物を講ぜしめた。又、小學校が夏期休校の折には必ず學校教師を聘して我家に夏期學校を開き、村内の子弟と共に吾等に學業を授け、以て休學中も尚ほ進學を廢せしめざらんと注意した。次で家兄が笈を負ふて都門に遊學するや、父は之を監督せしめんが爲に特に母を上京せしめて兄と家居を共にせしめた。あゝ、家計其だ窮乏に迫りし中に斯くまでに吾等が養育に手を盡し給へる父が苦心は如何ばかりであつたらう。予は今是等父の心盡しを追想するだに感涙に咽ばざるを得ない。予は十五歳にして父の膝下を離れ、都下なる某先輩の家に學僕となつた。而も、父は深き〱注意を以て常に予を督し、予を憐み、予を諭り、予を訓へ給ふた。

（五）

予が物心を覺えてより以後に於ける父の生涯は、殆んど全然「吾が子の爲め」に注がれた樣に思はれる。然るに此程までに父が心を注がれたる「子供」の吾々は今まドウである。學成らず、業成らず、世の爲に働かず、道の爲に盡さず、碌々として唯だ生くるのみ。何を以て能く嚴君の鴻恩に酬いやう。あゝ吾れ故人を紀念せんと欲して却て我が罪の大なるに泣かざるを得ない。

病床に在ること二十日許、明治二十九年九月十五日の朝、父が最後は早や切迫したる如く見へたが、やがて彼は微かに笑を湛えて、傍にありし次兄を右手に抱き、予を左手に引寄せ、長兄、末弟、母、叔母、從兄、其他の親族を周圍に坐せしめて、自は眠るが如く逝き給ふた。其時の光景は今尚ほ眼のあたりに見る如くである。

（六）

父を紀念の章としては、本書は素より其價が無い。併し、本書の文章が初めて予の日誌に記入されし時と處とは、余の生涯に對して可なり深い印象を與へて居る。予の四支を凍傷せしめた嚴寒の氷と、予の腦髓を眩暈せしめた酷暑の汗とか、多少此小冊中に痕跡を存して居る。以て多少の紀念とするに足るべきか。尤も予が獄中にて最も心を注いだものは西洋社會主義史であつて而して出來得べくんば之を此紀念日に發行しやうといふ志であつた。然るに豫測せざる事件のみ起りて其原稿の整理が未だ半途に達して居らぬ故、已を得ず本書を以て之に代へたのである。

以上を以て序と爲す

明治四十一年八月廿八日東京府下角筈の僑居に於て、蟬に嘯く、哀れなる蟲の音を聽きつゝ、之を識す。

石川三四郎

●雜誌管見

▲東北評論（四）　前號二號の記事の爲め執筆者高畠素之氏は輕禁錮二ケ月に處せられて目下前橋監獄に服役中なるが、第三號の「無政府黨を撲滅せよ」も亦其筋の告發する所となれる由、編輯者遠藤友四郎氏は或は又、入獄の厄を蒙るも知れずと云ふ、いづれも同じ秋の夕暮とも申すべし（高崎市柳川町十二共耕發行）

▲高原文學（三號）　長野市に於ける社會主義者の經營する文學雜誌なり、清新の氣、溢るゝを見れども、革命の熱、急進の想は現はれず、蓋し革命の噴火を文學といふ霞の中に包みたる故か、但し守田有秋、幸德秋水、阪本克水諸氏の寄稿を見る、態度沈滯として青年文學者の風貌を眼前に見るが如し（長野市長門町六二高原文學會發行一部五錢毎月十五日）

▲農村新聞（第一號）　創刊の辭に曰く「多數農民の生活は日々に悲境に沈淪して、今や古來の美風として稱せられたる質朴、敦厚、友愛の精神、地を拂ふて去らんとし、山紫に水清き處、罪惡と悲慘の聲を聞かさるに至る、農商務省の統計は、年々二萬八千二百餘人の農民が、郷土を抛ちて都會に又海外に出稼ぎしつゝあるを示しつゝあるに非ずや」「今の時に於て、農村の疲弊を救ひ、農村繁榮の策を講せずんば、終に社會の根底を如何せん」「白の制度も、千の施設も、自覺なき多數農民にとりては蛙面の水のみ、馬耳東風のみ、今日の急務は多數農民の自覺を促がすの一事にある也」「單に自覺を叫ぶ所は社會主義にも非ず、「國家の隆昌」を願ふ所はトルストイにも非ず、本號には其理想とする所未だ判明せず、要するに農村の疲弊を慨して起れるものと見れば大過無かるべし（群馬縣吾妻郡中之條町農村社發行、毎月一回一日發行一部四錢）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

空裡光(二)

南無百南無十歐人

道は無對也

「天命之謂性、率性之謂道、」―(中庸)

「太初に道あり、道は神と偕にあり、道は即ち神なり。この道は太初に神と偕に在りき、萬物これに由て造らる、造られたる者に一として之に由らで造られしは無し、之に生あり、此生は人の光なり、光は暗に照り、暗は之を曉らざりき」　約翰傳一の一

「道者、萬物之奥、善人之寶、不善人之所保、美言可以市、尊行可以加人、人之不善何棄之有、」(老子)

(一)

道は唯一無對である。天道といふも、人道といふも、理といふも、化學といふも、道德といふも、宗教といふも、皆是れ言葉の上の差別に過ぎぬ。天地萬有は唯だ一筋道を以て透徹して居るのだ。吾等が此世に生活する道も、亦素より一筋のものであれば、其間に何等撰擇の自由は無い筈である。世間では、善だの、惡だの、正だの、邪だの、是だの、非だのと言ふて、恰も此世に二筋の道がある樣に唱へ、邪惡を捨て、正善を取るを是なりと稱すれども、是れは道其のものゝ區別では無くして、同じ道を行く人々の動作に區別を付けたに過ぎない。例へば、道は鐵道の樣なものである。今、一筋の鐵道を走る汽車中に多數の旅客が乘て居る。其旅客中には泥棒も居れば金持も居る。掏摸も居れば學者も居る。貴族も居れば平民も居る。汽車は是等のものに差別を立てず、之を一列にして先き先きへ運搬する。其れを世間では貴族や學者や金持の行く道と、平民や掏摸や泥棒の行く道とは全然別ものゝ樣に考へて、一を正善の道となし、他を邪惡の道とする。是は大いなる誤りと言はねばならぬ。老子が「道者、萬物之奥、善人之寶、不善人之所保」と言ふたのも又、基督が「天の父は其日を善者にも惡者にも照し、雨を義き者にも義からざる者にも降せ給へり」と言ふたのも、皆此一筋道を說いたのではあるまいか。徒らに善惡正邪の形式に拘泥して居る者は蓋には一個の道德的化石となつて了て、到底此廣無邊大なる天父の恩惠を感ずるとは出來ない。又、一例を擧げて見やう、或る明月の夜、月が池の水面に映つたとする。風靜かにして水面滑らかなる時は、月は圓々の光を其儘コヽに宿すのであるが、一たび微風でも吹き來り、水面動いて漣の起るあらんか、月影は忽ち碎けて銀の鱗の如くなるのである。世間の人が善といふのは此圓々の月光を指し、惡こいふのは此銀鱗の月光を指すのである。乍併、其圓々の光も銀鱗の光も、共に天上に輝やく一個の月の影に過ぎんではないか。人若し其影象にのみ執着して其本家の光明を忘れんか、其人は徒らに池中の月影を追ふて水中に溺る、所の猿猴と選ぶ無きに至る。

(二)

併し、道は唯一無對なりと言ふても、單に言ふ丈では無い。例へば、池の水面に月影が映ずるのは、單に透明なる水の作用では無い。月光皎々として天上に輝やくが故に、水乃ち之を受けて之を池中に宿すのである。假令又、月光輝き、池水透るとも、盲眼にして盲する時は到底之を見る事は出來ない。即ち、唯一の道が此三者に透徹して居る故に三者相應じて茲に此美觀を現じたのである。王陽明が「天没有我的靈明、誰去仰他高、地没有我的靈明、誰去俯他深、……如此便是一氣流通的、如何與他間隔得」と言へるは即ち此事であらう。又、パウロは次の如く言ふて居る。

「靈の顯しを各人に賜ひしは益を得しめん爲なり。或は靈に由りて智慧の言を賜はり、或は同じ靈に由りて知識の言を賜はり、或は同じ靈に由りて信仰を賜り、或は同じ靈に由りて病を醫す能を賜り、或は異能を行ひ、或は預言し、或は靈を辯へ、或は方言を言ひ、或は方言を譯するの能を賜れり。然ど凡て此等のことを行ふ者は同じく一つ靈なり」(哥林多前書十二の七、十一)

凡ての現象が一つ靈の發作なるが故に、月は照し、水は映し、眼は見るといふ風に相應ずるのである。之を王守仁は「一氣流通的」と言ふたのである。然り此の如く靈光一切の物に流通するが故に、萬物相照し、相映じ、相見ることが出來るのである。而して此の如く遍く流通するが故に、道は無對にして四通五達、些の障礙無きを得るのである、若し道が相對のものであれば、其は有限の道である。例へば東海道といふ道は東京から京都に達する相對の道である。故に其道は京都東京間に限られて有る。乍併無對の道はコウ限られては居ない「上下四維無等匹」で、何處から何處までと言ふ樣なものでは無い。此道を行くは恰も空中飛行器で旅行する樣なもので、自由自在、四面に通達して其蹤跡を留めないものである。之を假りに無の道とでも言はうか。昔時、支那の趙州和尚は大衆に示して、「至道無難、唯嫌揀擇」と言はれたとの事である、日本の大燈禪師は之に注釋して「道は通達の義、驢も通り馬も通り、一切衆生、等く通て障り無きを言ふ。爰で至道と云ふは、何の道であらうの、人天は勿論、畜生は橫、山は高く、海は廣し、東西南北長安大道、タッタ一筋にあき通た至道」といふて居る。又、其揀擇とは、正法だの邪法だの、是だの非だの善だの惡だのと分別計較するもので、此の如き揀擇をなすは畢一筋の至道を見えざるが故である。故に趙州は「唯嫌揀擇」と言はれたのだ。

(三)

萬物は此道に依て生し、此道に依て存えし、此道に依て滅する、鳶の天に飛び、魚の淵に躍るのも、此道である。雨降るも此道、風吹くも此道である。實に「萬物これに由て造らる」だ。色も空も「同出而異名」で、名は異なつても皆此道の作用である。一にして多、多にして一、千差萬別の現象は然として此一道に透徹するのである。孔子は「緡蠻黃鳥止于丘隅」と、いふ詩を讀んで曰く、「知其所止、可以人而不如鳥乎」と、今の人、其止る所を知るもの果して何處にかある。月影を追ふて水中に溺れざるもの幾人かある。然らずんば、小理窟に執着して一の化石とならざる者幾人かある。

夫れ此道に生あり、「生は人の光なり、光は暗に照り、暗は之を曉らざりき」あゝ人、自ら其道を來れども、其來し方を知らず、自ら其道を行けども其行く道の遠近を知らず、是れ我等が今日の生活の有樣である。

放浪少年 ゴルキイ伯

是は元新紀元社に來て居た一少年(當時)の書簡です、此少年は其相貌が頗つてゴルキイに似て居ると云ので何時かゴルキイ伯杯と綽名せらるゝこととなりましたが、初め德富蘆花氏を慕ふて上京し、諸方に放浪した後、新紀元社に來り、常に放浪主義を唱へし爲め「放浪君」てふ別名もありき、其後德富氏の助力にて渡米せし由聞きけるが、今は思ひがけ無く此書信に接しました、空しく篋底に葬むるは惜しければ左に掲載することなしぬ、中に「世界婦人は、もう廢刊したでしやう」の一句あり、流石に放浪君だけありて、遠慮會釋の無い所、面白くも、又、可愛らしくはありませんか(ひで子)

拜啓、陰鬱の日本の獄が、石川大兄を封じた時でした、小生がパシフイックを渡り、ロッキイを犯し、旅裝、杖一つ、漂浪の頑い蹤跡を此シカゴの樣な大都會の中央へ印したと、……あゝ思ひ起せば既に一年と二ケ月を經るぢやありませんか。

石川大兄も其後さぞ若勞をナサれたでしよう、福田樣も御健康ですか、貴所方を中心とした社會の人々もサゾ變り果てたでしやう、世界婦人はモウ廢刊したでしやう、……あゝ「記憶」。此「記憶」がなかつたなら僕は今日に死しても良い。もの悲しい寂しい、しかし乍ら甘い女の樣な「記憶」。今でも覺えて居る、瀟洒たる新紀元社の障子張、ぐるつと取り圍むだ人々の面貌、夥しく積むだ新刊の雜誌、[illegible]石川大兄の話聲、白詩を愛讀せられた飛白羽織の立姿、時々若く見えたり老つて見えたりした福田姉それから汽船の樣な家造りの「福田家」、なつかしい顏。風呂水をよく汲ませられた古い井戸、それから夕暮に哀歌の樣な調子で蒟蒻屋が通る淀橋の人通、蕭條とした外山の原、それから、それと果しが無い。あゝ、なつかしい「昔」「記憶」。併しトルゲネーフぢやないが、此樣な過去の生涯は段々と「煙」の樣に流れ去るのぢやありませんか。ガヤ〳〵した群集の聲が薄く夕暮の空に消えて行く、あゝ、あれは「今」を葬る寂しい人生の聲です。

小生自身も變りました、是迄隨分種々なへゲしい苦悶を辿りましたが、今は實際、人間の靈性と肉體との抱合燒點たる「勞働」即ち人生の目的は矢張り是だと自覺しました。感謝す、わがヤスヤナポリアナの老大人、又恩師德富健次郎、又我が落魄の孤影を溫かき光にて包まれたる二人石川三四郎氏福田英子女史、懷疑の濁々たる生活より深き人生を觀しめ、僕の個性を更に永遠の人道に具體せしめたる者、忘るべからざる此四人の人々に與ふ。

僕も五六年には是非歸朝して血を啜つて諸大兄と新しい生活を說くことを期します。古い僧侶、古い政府、古い家庭、古い都會、古い婦人、古い男性、コンなものは皆喪沒の樣に火にして、新しい「人」と新しい「社會」が建てるのは、あゝ矢張り「革命」だ。肉からでも靈からでもよし、暗をつらぬく大砲に「革命」といふ大震動が人と人との胸腔に起して立ち昇がつた時、頭上には大きな噴水車が築かれやう、砲[illegible]工[illegible]は[illegible]になろう。(以下次號)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社會民主々義大成者
カル・マルクス（四）

石川旭山

『資本論』梗概（承前）

第三　正規の勞働時間

勞働の時間には適當の延長限度あるべし、而して此正規の勞働時間は法律を以て確定せらるゝを要す、「一種の制限は自然に依て設定せらる、例へば其限度以下に陷る能はざる最下限度あり、其最下度の制限は即ち勞働者の生活要素其ものに等しき生産を爲すべき時間なり、然れども、資本制度の下に於ては資本家も亦た其勞働に依て扶持せらるべき者なるが故に、到底實際に於て此最下限度に縮少すると能はず、又た例へば其限度以上に高むると能はざる最高限度あり、其高き制限は二種の條件に依て確定せらる、一は肉体上の條件、一は道德上の條件是なり

（イ、）身体上の制限、是れ勞働者の身體の持久力に依て定まる、勞働時間は勞働者が正規の勞働生活を終るまで毎日正規の勞働を持續し得るの限度を超過すると能はず、此問題を研究するに就ては其引例として馬を擧ぐるを常とす、彼は傷害を受けずして毎日八時間以上働くと能はず、

（ロ、）道德上の制限、勞働者は其時代の社會狀態に從て、政治的、智識的、社會的要求を充す爲めの時間を要す、然れども最高限度と最下限度との間には著しき空地を存す、故に現に行はるゝ勞働時間に種々なる差異あるを發見すべし、或は八時間なるあり、或は十時間なるあり、或は十四時・十六時・十八時間なるあり、區々にして一定せず、是れ事實の要求を精察して以て法律に規定すべきものに屬す、マルクスは八時間を以て最良限度と定めたり、蓋し之に依て勞働者の身体の健康を永く保持するを得べく、且つ日々益々緊急必要を感ずる所の智識的社會的要求を滿足すべき餘暇を勞働者に與ふるとを得べし、彼は八時間勞働を以て正當なりとする理由を示さずして、屢々其主張をなせり、然れども彼は法律を以て之を確定するの必要なる事を甚だ強力に主張したり、而して更に其後に於ても尚ほ雇主の態度に深く注意するの必要あるべしと言ひ、雇主等は法律に係はらず、時間の延長の手段方法を發見すべしと啓示したり、英國に於て或る種類の産業に就て十時間勞働制を定めし時、雇主等は各食事時間を五分宛削除して十五分或は二十分の時間を巧みに剝取せしとあり、僅かに五分宛と雖ども、全體の上より計ふる時は其利益は驚くべき額に達するなり、マルクスは一產業家の談として記して曰く、君若し余に毎日十分宛の例外時間を與ふれば、君は一年の中に一余のポッケットに一千磅を投ずるなり、マルクス曰く是れ即ち剩餘價格の起源を能く說明せるものなりと、かくて彼は全然英國に於ける工場法の歷史に入れり、彼は其工場法が勞働階級及び製作業者の兩者に對して多大の利益を與へしとを承認し、而して曰く、一八五〇年の條例以後、綿花產業は英國に於ける模範產業となれりと、彼は一八四八年佛國が革命的方法を以て同時に全國に十二時間法の原則を設定せる場合と、英國立法に於ける漸進的方法とを比較し、主義としては英國の方法が佛國の其に劣ると多大なりと考へたり、然れども彼は又た其結果は寧ろ英國に於て一層強固ならんとを認めたり

▲第四　機械論及び勞働階級に於ける固定資本の發生

產業發達の全進路は相對的剩餘價格を新に發生するの歷史なり、金錢を支出する資本家の利益の爲に相對的剩餘價格を新生するの歷史なり、勞働を經濟的にし、又は積極的に其生產力を增加する所の總ての物は、勞働者の側に於ては勞働の時間を短縮し、資本家の側に於ては之を延長す、勞働の分業、再分業、結合、共働、團結、發明、機械等は總て『一方に於ては社會の經濟的變化に於ける歷史的進步發達の要素なり、然れども、他方に於ては、總て是れ勞働者横領の文明的開化的手段なり』彼等前掲諸種の進步は勞働者を使役して啻に社會的富を增殖せざるのみならず多くの場合に於て勞働者に積極的損害を加ふるものなり、此等の進步は資本家に對して其全利益を寄與すと雖ども、資本家は之が爲に何等の消費をも爲さず、分業、結合、結團等は社會的勞働の自然的手段に過ぎず其如何なる種類の自然的手段も資本家に依て造らるゝと無し又た發明は科學の結果なり、而して科學は何等の消費を資本家に待たず、勞働、團體、科學、是等は增殖の原因なれど、資本は與らず、されど資本は其全體を占領す、機械は無論資本なり、然れどもマルクスは其如何なる價格をも生造せざるとを主張し、機械は其生產に使用中、或は破壞し或は損耗して其價格を生產物中に轉嫁すべきとを論唱したり、而して彼は產業發達の一般的結果として、第一賃銀を減削すると、第二勞働時間を延長すると、第三、勞働階級の半ばをして過超勞働を爲さしむると、第四、其殘餘勞働者を失業せしむると、第五、全剩餘を遂に少數資本の手中に集中すると（勞働者を利用し、又た資本家同志が互に横領して私利を增加す）等を數へたり、其最末の點は更に說明するを要せざる可し、而して第三及び第四の點は別に『請負小仕事』相對的人口過多の項目の下に說明すべし、故に左に殘餘の二結果に就きて簡略にマルクスの意見を紹介せんとす

（イ）產業發達は勞銀を減削するに至る

マルクス曰く、其發達は第一に勞働者の智識と身體とを毀損して以て勞銀の減削を來す勞働分化の結果として、勞働者は速かに單に一局部の職工となり、腦力の勞働は漸次に腕力の勞働より分離し、次で其職務の差別は勞働の等級を生ずるに至り而して其等級は勞働横領に一大好機會を供する也、腕力は從前よりも多く省略するを得べく從て婦人及び小兒の安價勞働は成年男子の高價勞働に更るゝ多大なり、若し此現象にして增々進まんか、資本家は從來一家の主人のみを雇ひし賃銀を以て全家族の勞働を取得するに至る可し而して勞働者は自巳の勞働を賣るの代りに其妻子を賣る所の一個の奴隸商人と變化すべし、此の如き種類の奴隸は雇主も勞働者も拒否せざるとは、マルクスの疑はざる所なり

（ロ）產業發達は勞働時間を延長するに至る

機械は常に運轉するを得、而して之を常に運轉するは資本家の慾望なり、何故ならば資本家は人類能力相當の制限を超えて勞働者を使役するに、の好口實を發見す、即ち手工勞働に比較して其勞働が甚だ容易なりとの事是なり、資本家は常に訴ふ、固定資本の增大する結果として長時間の勞働を必要とする也然らざれば經費の支拂を爲すと能はざる也と、然れどもマルクスは之を以て誤謬なりと言へり、何となれば、工場視察者の報導に從へば、勞働時間を十時間に減じたるの結果は却て生產を增加して之を減少すると無かりき、而して其說明に若し勞働時間を短縮せんか、勞働者は其就業中に熱心に働くとを得る也、と言へり勞働時間を短縮するは生產を增加するのみならず實際に賃銀を增加する所以なり、レッヂレーヴ（Redgrave）氏が一八六〇年度の報告に曰く、一八三九年乃至一八五九年の間に於て十時間の原則を採用したる工場に於ては賃銀を增加したり、而して十四時間乃至十五時間の勞働を強えし職業に於ては常に賃銀下落したりと、小賃銀と長時間とは常に一致並行するもの也、蓋し資本家をして賃銀を減削せしむるも、勞働時間を延長せしむるも之と同一原因に基くものなれば也

▲第五　仕揚勞働（Piece Work）
（仕揚高に應じて賃銀を支拂ふ制度なり）

マルクスは主張す、產業の發達は過超勞働を來し、不相當に激烈なる勞働を强ゆるに至る機械は終日終夜如何程にても運轉せしめられ而して勞働者は種々なる手段を以て此に勞働するとを强制せらるれば也と、其手段中賃仕事は最も多く過度勞働時間を生ずとてマルクスの最も激烈に非難せし所なりマルクス曰く、賃仕事は十四世紀に於て既に行はれしと雖ども、其大に流行し來れるは大組織の產業、起りし後にあり蓋し是れ賃錢支拂に最も便利なる方法なれば也、此れ唯だ工場條例の支配の下にある工場に用ゐらるる方法なり、蓋し工場條例の下にある工場に於ては勞働時間を延長すると能はず、而して資本家は勞働者の勉勵を增さしむる外に勞働者を橫領するの方法無ければ也、某著述家は『賃仕事の制度は勞働者の歷史に一時期を劃せり、蓋し是れ資本家の意志に依賴する所の賃銀勞働の地位と近き將來に於て職工にして且つ資本家たるを得べき共働勞働者の地位との中道に立つ者なれば也』と言へりしがマルクスは痛く此思想を潮罵したり、彼は賃仕事の制度が資本家をして容易に且つ多く勞働を橫領せしむとなし日雇賃銀を以て一貫するが寧ろ遙かに勞働者の爲に幸福なりと主張せり、彼は此兩制度の並行せる活版工及び船大工の如き職業の經驗を以て之を說明したり、而して彼は一八六〇年の工場視察者の報道中より、二百人の賃仕事と二百人の日雇を併て四百人の勞働者を以て組織せる一工場の例を引用したり、賃仕事勞働者は過度時間の勞働に依て利益を得、日雇勞働者は一時間又た半時間の追加勞働に無報酬にて服從せざる可らざりき、之れ猶ほ立法を以て制止するとを得べし、然れども仕揚拂の方法に於ては、一方其橫領を閉鎖すれば却て他方に開き、立法は常に無效に歸せられん、此制度の特質は或は賃銀を減却し、或は勞働を增加するの便宜を備ふ、仕揚制度に於ては、勞働の價値は其成せし仕事の價値に依て決定せらる、而して其仕事が中等の品質を具有するに非されば約束の代價を支拂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ば、れず資本家は巧みなる口實を有す、其理由は、其設立せし仕事が未だ約束點まで上達せずと言ふにあり、又た資本家は勞働者を激勵せしむるに確實なる方寸を有す、資本家は賃仕事の結果よりして、一定の仕事を仕揚げるに普通如何程の時間を要するかを制定す、而して中等の生産力を有せざる勞働者に最低限の仕事をも爲す能はずとの理由を以て解任せらる、又た其業務に懈かる、者も時間制度に於けるよりも其平均賃銀は甚だ低廉なり、素より優等の勞働者は仕揚勞働によりて多くの報酬を得べけれど、一般人は然らざる也、最優等の勞働者も其仕揚の割合よりすれば他の者よりも小額の代價をうくる也、蓋し其人は同じ時間に多くの仕事を成せば也、而して資本家は優等勞働者の例に從つて報酬の標準を定む、是れ低價の勞働者に對して甚だ損害を與ふる也、されど時間勞働より仕揚勞働にふるは、結局中等勞働者をして同一賃銀の下に從前よりも多く勞に服せしむるに至るなる也、然れども報酬の一定限度が久しく繼續して確定の習慣となる時は、資本家が其報酬の減額を要求すると甚だ困難となるべし、資本家が之を減少せんと欲する時は、常に時間勞働制を回復せんとを暴力を以て迫らるべし、マルクスは一八六〇年に於けるコヴエントリー市リボン職工ストライキの實例を擧げて之を説明したり

マルクスはダンニングの言を引用して曰く、倫敦に於ける洋服勞働に於ては、秀逸せる能力を有せる見本的人物に雇用して、先づこれに格外なる報酬を與へ、以て餘他の勞働者をして其見本人物の如く[illegible]せしめんとするを通例とすと、マルクスは、又た少年雇用調査委員の報導に示されたる、陶器工場における勞働者の墮落の殊に婦人少年の墮落を以て此仕揚勞働の結果なりとせり、マルクスは仕揚勞働制が過度の勞働を來すとの理由を以てこれに反對せると同時に又た其安價勞働を湧出すと、理由を以て之に反對したり、資本家は其仕事に就て唯だ人を眩惑せしむる如き希望を懸けて以て其要求よりも多くの人足を引付けることを得るなり、蓋し資本家は其仕揚高に應じて賃銀を支拂ふものなれば少しも危險を冒さゞるなり、かくて民衆は全體雇用せらるゝ能はず、又た充分に賃銀を受くること能はざる也

▲第六●●相對的人口過多●●●●●

Relative Over Population

近世産業發達の特異なる現象に夥しき勞働群が職業の外に遺棄せらるゝ事是なり、マルクス是を呼んで相對的人口過多と稱す、絶對的人口過多に就ては彼の少しも恐れざる所なり、彼はマルサス論者に非ざる也、彼は各國家各時代に因りて一貫せる人口法の存在せざることを主張す、社會的有機組織は動植物に於けるが如く各自に差異を存する也、彼等は異れる法則と境遇とを有す、各國家、各時代は自ら其人口法則を有す、恒に増加する所の人口過多は是れ現代の一特徴のみ、現代に於ける産業組織より生ずる必然的結果のみ、然れども是れ決して天然に於ける絶對的繁殖過多に非ず、マルクスの考ふる所に依れば是れ唯だ相對的の過多人口なり、總ての人の爲すべき事業は充分に存する也、寧ろ充分以上に存する也、若し或職勞働者にして過度勞働を與へられずんば、又た若し勞働が男女年齡の差別に從ひて相當なる程度に制限せられんか、現在の勞働民は現在の全國生産業を實施するに寧ろ不充分なる可し、勞働保護方法の多き英國に於てすら尚ほ且つ此例に漏れざる可し、故にマルクスは何人も勞働を免除せらるべき現由無しと信じたり、然れども現在に於ては、新機械の使用、産業の轉向、商業の恐慌、流行の變化、各種の變遷に伴ふて吾人は常に多くの失、無業者と多くの不相應なる就業者との益々増加し來るを見る、此の如き相對的人口過多は資本家的産業經營の結果として避く可からざるの現象と言ふ可し、蓋し此制度に依て第一に勞働社會の半數をして其全體の作業を負担せしめ、次に其殘餘の半數勞働者をして小賃銀の勞働に服せしむるの己を得ざるに至らしむる也、低廉賃銀は蓋し相對的人口過多より生ずる勞働者間の競爭より生ずるなり、賃銀率の高上と下落とは、産業の轉機に伴ひ生ずる餘勞働群の多少に從て一般的の規則を存する也、是れ決して勞働人民の絶對的員數の變化に依て決せらるゝものに非ず、唯だ就業群と殘餘群とに分配せらるゝ勞働階級の相對的變化に依りて決せらる、即ち剩餘人口の相對的員數の增減に依て決せらる、されば賃銀率の動搖は資本の伸縮に隨伴し、人口狀態の變化に關はらず、此動搖に關する經濟學者の説はマルクスの頗る嘲笑する所なり、經濟學者は曰く、高額の賃銀は結婚を獎勵して遂に勞働の供給を增助するが爲に茲に自ら其下落を來し、而して低廉の賃銀は結婚を阻害して勞働供給を減削するが故に自ら其高上を來すと、マルクス曰く是れ甚だ巧みなる説なり、然れども高額の賃銀が剩餘人口を生ぜし以前に於て、既に賃銀は近世産業の轉機と共に高上し又た下落したり、而して職業の一般動搖に伴ふて再び高上したり

相對的人口過多に三種類あり、流行的潛行的及び靜止的是なり、流行的人口過多(Current Over Population)は外部の原因より來る者也、即ち産業の日々の行程に生ずる通常の變動より來るなり、此時緩慢に彼時活潑なる職業は自ら其固有の期節を有す、例へば春には家屋建築あり、夏には郵便交通といふ如き是なり、一八六〇年の後半期に於て倫敦に於ける失業者九萬人あり、而も尚ほ視察者の報導する所によれば此時に際し、人足の不足に依りて無爲に存立する機械甚だ多かりきと云ふ、是れ實に近世勞働の分化の結果即ち各自の勞働が單一なる部分に局限せらるゝ結果として勞働者が不具にせられしより生ずる現象也、他の流行的原因は近世産業の困難の爲に勞働者が其相當年齡に至るの前に老耗すること是なり、而して尚ほ中年に於てすら全幅の勞作に從ふ能はずして、殘餘部中に驅逐せらるゝ者、マルクス曰く、是れ實に勞働階級中に早婚の流行する眞實なる理由なり、彼等は一般に無思慮なりとて非難せらる、然れども彼等は實際深く思慮する所ありて然るなり、蓋し彼等は自ら其勞働に不適任となるとの早かるべきを豫見し、此時に及んで彼等を扶養すべき小兒の既に成長發達したらんとを希へば也、更に他の流行的原因は新發明及び流行なり、蓋し是れ多くの勞働者を驅逐するの原因となると常例なれば也

潛行的人口過多Latent over Population とは其作用が遲々として永續する所の原因より生起するもの是なり、其の最好實例は農業的勞働者の場合是なりとす、彼等は漸次に機械の更代する所となる、彼等は[illegible]其職業を失へる時、彼等は都會に集まりて其剩餘群を益々膨脹せしむ、[illegible]僕の大部分は、此變動の進途に於て、既に此處、彼處、各所に於て少數づゝ散在するなり、此[illegible]き波動の恒に存するは最も全地方に於ける潛行的人口過多を表示するものなり、而して農業勞働者の賃銀低き原因たるなり、

マルクスの靜止的人口過多（Stagnant Over Population）とは一局部の産業に於て就は[illegible]るゝものにして、何れの勞働者も[illegible]なると雖も、何れも規則的職業を得る能はざる場合を言ふ、

（完了）

歸帆

寒舟

暮れる小島　飛ぶ鷗
淡紅色映えし　西の空
金色流る　彼方より
悠然帆を卷く　二三艘
故郷の小山の　月淡く
游く網引く　夕煙
樂しき團欒　深き情
此宵彼子の　夢はそも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説 魔（四）

●ロカメサン著　二葉[illegible]譯

「これは鏡ですがね。何が寫つて見えますか」
「從兄が寫つて見えますわ」と言下に答へた。
「其人は何をして居らつしやいますか」
「口髭をひねつて居るのです」
「で。只今は？」
「ポケットから寫眞を出して居ますの」
「誰れのでしよう」
「自身のよ」
以上の問答は實際と寸分の相違もない。而かも其寫眞は其晩ホテルで受け取つたものなのだつた。
「どんな態度で寫つて居ますか」
「帽子を手に持つた立ち姿よ」
と云つて置いて從姉は恰ど鏡に寫つたものを視る通りの樣子をして名刺に見入つて居た。
今一人の若婦人は此光景を見て思はず叫んだ。
「もう澤山よ。ホントにもう澤山ですわ」
ドクトルは於是最も鹿爪らしく從姉に云つた。
「貴女は明朝八時に必ず從兄の方をホテルに御訪問なすつて五千フランの金額をお借りなさい。此の金額は此次の旅行に是非必要なのですから」
これだけ云つて置いて醒まさせた。
ホテルに歸へつて後も猶私はこの不思議な現象を考へて見た。そして心潜かに攻擊の材料を集めて見た。攻擊と云つた處で從姉に對してゞはない。從姉は醉興に眠むつた眞似をして見る樣な横着者ではない。而かしドクトルの擧動は大に怪しむ可き價値がある。ドクトルは恐らく彼れの手の中に鏡を隱して居てサブレ夫人の眠つた後で名刺を見せる樣な顔をして其實鏡を見せたのに相違ない兎も角其夜は其儘寢床に入つた。
處が今朝八時半頃に下僕が綬込みへやつて來てサブレ夫人の來訪した事を告げた。急いで寢衣を着更へ應接室へ行つた。從姉は何か氣味わり氣な顔付きをして眼を床に落して控へて居た。顔面被をも採らないで。
「私實は今日少しお願ひがあつて參上つたので御座いますが」
「何の御用件ですか」
「實はこんな事はとても面目なくて申し上げられないのですけれど。只今五千フランのお金が無くちや何とも致し方のない事件が湧き出しまして。」
「何を云つて居らつしやるのですか」
「ヘイ、實は私……否私の良人が今どうしても五千フラン許り急に入用なので……」
私は談話が餘り唐突なので呆れてしまつた若しか從姉がドクトルと同腹になつて私を揶揄うのではなからうかとも思つて見た、若しそうでないとしても此狂言は余程以前から仕組んであつたものに相違ない。則席にしては余り上手過ぎると思ふ。
非常に注意して從姉の言語擧動を觀察して見たが更に怪しい處がないので失望した。從姉は眞實心中の苦腦に堪えられないで震るへて居る。此お使者は隨分苦るしかつたものと見えて明白さ顔に顯はれて居る。でも私は從妹の家は有名な富豪である事はよく知つて居るから。貴女の御良人は只五千フラン位の金に御不自由なさる樣な方ではわりますまい。よく考へて御覧なさい。此事は確かに御良人が貴女にお命じになつたのではないでしよう」
從妹も此質問には暫時躊躇つた後で。
「ハ…ヘイ確に申し付けましたのですわ」
「御良人は貴女に此御要談をお委任なすつたのですか」
此問ひに對しても從妹は再三躊躇した。此間に遺憾なく私は從妹の心理狀態を瞯觀する事が出來た。要するに從妹は何事も知らない。只五千フランの金を私から借り出せばよいのだから夫れが爲めには凡百の辯言をかまへて居るのだ。
「ハイ、良人は全く私に委任致しましたのです」
「ではそれは何日の事なのですか、昨日ホテルでお目にかゝつた時には何のお話もなかつた樣ですが」
「ハイ、それはその………手紙は今朝參つたばかりなのですから」
「ではそのお手紙を見せては頂けぬでしようか」
「ヘイ、イヱ………秘密の事が澤山書いて御座いましたので燒いてしまいましたのですも」
「それでは何ですね。貴女の御良人は破産に瀕して居らつしやると云ふのですか」
此質問で又一寸躊躇いて。私は知りませんと云つた。
私は愛相つ氣もなく。
「兎も角五千フランと云ふ樣な大金は今一寸手元にありませんがね」と云ひ放つてしまつた。
從妹は苦悶に堪え得ないと云ふ顔色でホツと吐息をしながら。
「私……萬望お願ひです。どんなにかしてこれだけのお金額を御都合なすつて下さる譯には參らないでしようか」
こう云つて手を確く握りしめ聲を震はしてしやくり上げて居た
「どうぞ……どうぞ……私は強いて貴下に……若し此心中の苦しみをお察し下すつたなら……私どうしても今日中に……」
私は急に何だか可愛相になつて。
「ちや今直くと云ふわけには行きませんが兎に角何とか都合致しませう」
「まあ眞實に嬉しい事。何とお禮の申し樣も御座いませんわ」
「ぢやそれはそれとして昨夜貴女のお宅で如何な事があつたか覺えて居らつしやいますか」
「え、覺えて居ますとも」
「ドクトル、パアランが貴女に催眠術をかけたのも覺えて居らつしやいますか」
「え丶」
「それぢやもうよろしい譯をお話し致しませう。パアラン氏は昨夜貴女を眠らして置いて。今朝私の處へ五千フランの無心に行けと云ふ暗示を與へられたのです」
從妹は暫時考へた後で。
「でも此事は良人が直接に命令けたのですわ」
私はどうかして催眠術と暗示との事を知らせようと色々苦心して見たが到底駄目だつた。
從妹が歸つて後で直ぐ私はドクトルの宅を訪問した。ドクトル丁度出掛つた處なので立ちながら今朝の出來事を概畧と話した。ドクトルは絶えず微笑を漏らしながら。
「どうです。もう私の言が信じられましたか」
「でも信じないわけに行かないぢやないですか」
「ではお了解になつたとして御從弟のお宅へお伴致しませう」

。　。　。　。

從妹は苦悶に堪えないと云ふ風情で床上に呻吟して居た。ドクトルは暫時脈膊を檢した上で一方の手を擧げて從妹の眼前を蓋ふた。從妹の眼は段々重くなつて遂に閉ぢた。
ドクトルは昨夜の樣な鹿爪らしい顔をして
「御良人はもう五千フランのお金額を御入用ではありませんから。從兄の許へ借りに行く必要はありません。又若し從兄から此事に關して話しても何事も貴女には了解りませんよ」
かく云つてドクトルは從妹を覺ました。
私はポケットブックを取り出して從妹に云つた。
「今朝お話しのものを差し上げませう」
從妹は大變驚いて何が何やら解らないと云つた態で結局何事も要領を得なかつた。私は從妹の記臆を呼び起こそうと勤めて見たが悉皆駄目だつた余り熱心に説法して居たらとうとう怒りそうになつたので驚ろいて中止だ。

。　。　。　。

斯樣な譯で私は巴里から歸へつて來た。こんな事を見せられたので氣も心も轉倒して此頃は三度の食事もろくろく食へない樣な始末になつた。

●獄中消息

▲赤羽一氏より

へ獄中より啓上、其後は御變りもありませぬか△世界婦人やられ候由彼の所爲は愈よ出で、愈よ狂悖を極め候△監獄に暦日なし小生此處に投げ入れられしより早くも一ケ月を經過仕り候、月日の流れに早いものは此の早い月日の流れに掉して下れば何時かは理想の彼岸に達すべくと存じ候△十六日に裁判あり、久方振にて娑婆の空氣を呼吸致し候、檻車の窓より見ゆる娑婆の樣は宛ら薄紗を隔て、醜婦の顔に對する如く風情仲々可笑しきものにて候△石川兄未だ在京中なるや、猶餘有り難う、身體を大切にし給へ（福田宛）

▲大須賀里子氏より

脳はもうすつかり御よろしいのですか、御案じ申上て居りました、私は一人になつて却て呑氣に平和に暮して居ります「迫害の件に付ても此身に植れかし」私は少しもこの件に就て不平に思ひません、却て修養に好期を與へられたと感謝して居ります、靜かで仲々學ぶ所がわります。御自愛專一に祈ります（石川宛）

▲村木源二郎氏より

入監以來御厚情に預り感涙に不堪、監で御禮申上升、降りつゞく雨にて監内は意外に冷くなつて來ました、明日頃は赤になりますと思ふて居ります、幸に心身共に健全にござりますから御安神下さい、諸兄姉によろしく（石川宛）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

小說 放浪（七）

ゴーリキイ著 思生譯

「君は何が可笑しいんだ』と私は問ふた。翁の行爲が倫理的なのさ、清い朝風が直接に胸に吹いて、小雲もない、晴れた、美しい天に太陽が昇つて、輝く日を下界に投げたので、私の心は静からぬ生氣に充つた。

シャクローは滑稽な眼色で、顔を歪めては聲高く笑ふた、其の嬉しげな聲を聞くと私も同時に破顔さずにはゐられなかつた、牧畜者の所で焚火に炙つてゐた二三時間は種々な甘いパンだの燒豕肉だの貰つたので少時くは生活難を逃れて手足の自由を覺えたが、此の感覺も行くに從れて消えて了はねばならなかつた。

「何が嬉しんか、種々な食物を貰つたので夫れが嬉しいんか、滿足なんだらう』。

シャクローは頭を振つて私を肘で突き、顔を歪めて更に笑ひながら、大きな聲で話を始めた。

『笑ふ意味が解らんか、市長の所や稅關に引張られたら何なつたらう、……君から海に突込まれたら溺死したらう、それより然鋼に處れた方がいくら幸福か知れん、解つたか？ それを僕は最初戯言だとばかり思ふてゐたよ、オー、危險い！』

私は彼の意見の不條理を說明し、而して彼が不正の旅行券を持つてゐるのも知つてゐる、それは餘り人に喜ばれない……突然私に猛烈な考が浮んで……。

「癒し給へ、君は僕の言つたとを眞に受けたのか？』。

「否！…………君が僕を水の中に突込うとした時は信じてゐた……然し君が先立つて入つた時は信じなかつた！』で

「然うか、——何だ無益ない、失敬したね」

「否！ 僕が失敬した、君に大いに謝さなくちやならん、焚火の處でも互に凍てゐるのに、君は君の外套を折角乾かして、それを僕に着せて與れた、だから感謝するのだ、實に君は善人だよ……僕は絶えず左樣思ふてゐる、チフリスに歸つたら何でも君の氣儘にして與れ給へ、父にも能く話して充分の禮をして貰ふ積りだ、御馳走もし、酒も呑して與れ、私なんか家と一所にゐても關はん、と云ふよ、我家に居給へ、酒でも肴でも何でも彼でも、君の欲しい物は望み次第だ……ハヽヽ……君も滿足だらう、何も氣兼することはないよ、……兩人で大いに飲み、大いに食ふちやないか……』。

彼はチイフリスに行いての生活の趣味をなが〜と說明したが、私は彼の話を聽きながら、新道徳と新努力を以て飾られた、多くの不幸な人の身の上を慮はねばならなかつた、靜に人生の道を進み行く間に、生活は鈍り、友に出會つても互に理解することも出來ず……放浪人の生活は困難である意志なく空中を徘徊ひ……稀れに穀物が實を結ぶべき地に芽を出せば、種蒔の種のやうに其處を徘徊ふ……。側は黃昏れて、遠き海は薔薇の花のやうに金色に輝いた。

「ア、眠たい！」とシャクローが云た。

兩人は佇立まつた、シャクローは海岸の砂が風に吹かれて堀れてゐる穴の中に入つて、外套に頭を埋めて眠つて了つた、私も海を眺めながら彼の側に座つた。

遠く海の彼方に猛烈な動搖が生き、波の列はザワ〜鳴つて岸に打ち寄せては砂を撒散らし、砂は嚇々と水を吸込む、白い囂を掘起しながら、眞先の波は胸を岸に打付けて打ち返す拍子に、援助に來る列と衝突し、泡と泡は抱合つて亦岸に打寄せては、彼等の輝く反抗力を擴張し、水平線から岸まで海の全面は、軟弱で强い波濤に充ち、絶えず厚い群を爲し、互に一致團結を爲してゐた。

太陽は奇麗な脊を輝かし、遠く水平線上の波の間に、彼の赤き血潮を浮べ、默してゐる岸に躍る波の最先隊は咫敗であつた、彼の脊後には太陽の光線に、虹のやうな色彩を染出されてゐる大海の闇體が續き、而して眼界は海洋の美と夜の緩かな意識に充ちてゐた。

岬の脊後には汽船が、海の膝の上に貴賓を搖りながら、海に溝を鑿け、波の峰を越えて地面を滑るやうに此方へ急いで來る、船の金屬の部分が、太陽の光線に反射して奇麗に輝いてゐた、何時か彼は人間の高慢な事業が自然力に打勝つたと云ふ思想を生じたであらう……然し私の側に一個の人間が橫つてゐる……此れは自然力其者ではない乎………。

（八）の上

吾等はチレクの國境を通つて行つたが、シャクローは酷く暴狂ふて、恰で惡魔のやうに搔猛つたり、片々に裂たりするので、空腹の爲かと聞くと、さうではなくて唯だ多くを貪りたいばかりであつた、而して彼は何な仕事でも錄に爲たとはない、何時か不打機械で惡の取除をやつたが、半日働いて、新しい衣肉を肉刺に突刺し、それを兩手に持つて逃亡した、亦或時は十字刺樹の根掘をやつたが斧で皮を斷つて潤まして了つたとがある。

兩人は二日働いては一日づゝ歩いたが、シャクローの大食と奢侈には愛憎が盡きた、蓄金をすれば少し位の金に不自由はなかつたいだが、絶えず服の一部を新しくするので、何時も貧乏をした。

彼の服は補綴を當て、色で誤魔化してゐるので大部分は穴であつた、それでスタニザの酒店に行くな、好きな酒を少時く我慢せよ、と屢々忠告を試みたが、一向心に留めず、或時は私の脊囊から五ルーベル盗出して酒店に入つた、尤も其金は兩人で蓄金したのではあるが、彼に見せると直ぐ呑れて了ふから、苦心して隱してあつたのだ、晩になると私の働いてゐる庭園の家に、ヘレケになつて、肥つた高加索の女を一人連て歸つて來た、其の女は妙な奴で私を見ると、

「今日は、生涯浮かむ瀨なき異敎信者よ」

「何故、異敎信者だ」私は挨拶に驚いて反問した。

「何故、惡魔でないか、若者が女を愛するのを禁るのは惡魔の爲だよ、法律の容してゐるのに汝さんは禁るのか……呪はれたる者よ」。

シャクローは醉つパラつて、黙つて彼女の側に佇つて頭を垂れてゐた、何を感じたのか彼方此方へブラ〜逶迤きながら、下唇を嚙み、阿呆のやうな顏して、草色の眼で私を凝視た。

「何をしてゐるの、早く此人にお金を返してお與れ！」と元氣の可い高加索の女が叫んだ。

「金を何うしたと云ふんだ」私は驚いて問ふた。

「返せ！ 返せ！ 返さないと警察に訴へる、汝さんはオデッサーで此人の金を百五十ルーベル奪つたぢやないか」。

何を云ふのか私は彼女の言葉を理解することが出來なかつた、警察の小舍に入るのは此の有頂天になつてゐる惡魔婆が遡してゐる、吾等放浪の國民に對しては、スタニザの政府は充分の蓄金を產らせねばならぬ、而して私に對する拘留云々が如何なる結果を生じるか、之れは如何なる人でも知ると出來まい、私は變と外交談判を始めたが何等の奮闘を用ず、唯だ三瓶の酒の扶を藉て彼女を鎭めた、彼女は水甜瓜のある地の上に倒れて睡つて了つたので、シャクローを休ませ、而して早朝婆を甜瓜の間に置去にして、スタニザを出發した。

シャクローは宿醉で半病人のやうに、顏を顰して歩きながら、お化のやうな眼色をしては、時々歎息を吐くので、私は種々話懸けたが、彼は疲れた馬のやうに感起つた頭を垂れて何とも答へなかつた。

日中は溫くなつて、空氣は吾等の肩まで密に延びてゐる濕つぽい草地の蒸氣に全く飽滿し、何處でも吾等の周圍は綠の海のやうで、蒸熱い天下は、頭を痲痺させるやうな芬香を吹出してゐた………。

草を刈つて狹い徑を歩いたが、小さな赤蛇が爬ふて足に溶解り、地平線には太陽の光線を映て銀色に輝く雲の連山が擴がつた——それはダゲスタンの山である、寂寞が吾等を圍んで睡氣を催させ、夢み心地の疲れた狀態に落し入れ、脊後の天は厚くて黑い暴風雨の雲が靜かに流れて、互に濯ぎ合ひながら天を過行くのであつた、明い時は片々になつた雲の破布を浮べて、頭の上を前方へと離れてゐたが、漸々に厚くなつた、遠くで鳴つてゐた雷も次第に近くなつて、大きい雨の滴に打たれる草は、金具のやうにヂャン〜鳴響のであつた。

田中翁鶴吟

大雨にうたれたゝかれ行く牛の
　くるしの嘆わとかたもなし

翁曰 功成て帰らすさいふ所でがすかな、若い人衆にごんな歌を聞かせると其りやア眼がりますよ

つかれてはコロリ憂寐の眞似をして
　死ぬ程のラクはあらじとぞ思ふ

翁曰 云は前網役に得た時のでがす、其後入院した人を見舞た時此歌を作いて病室に貼付た所大そう喜ばれましたつけ、其の者に其人も到頭死にやした

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

谷中村民の訴願

世間では既に谷中村は滅亡して人民は一人も同村内に住留しないもの、如く想像して居るかも知れぬ、ケレども事實は甚だ相違して居る、尤も法律上では谷中村は瀦水池の名を蒙り、土地收用法を適用せられ、事實に於ても村民の住宅は警察官自ら破壞し去つた、ケレども人民は少しも怖れなかつた、斷乎として其地を去らなかつた、暴威を逞ふする警察官も遂に如何ともする能はずして手を引いた、而して村民等は今日も尚ほ舊宅の跡に假小家を建て、士氣しく居る、コウなつては當局者も見て居る譯には行かぬと見えて、此頃マタ〳〵新案を出して人民を窮追しやうとするとなつた、他無し河川法の準用と言ふことである。左に掲ぐるは即ち之に對する村民訴願文の大要である、訴願の理由は十八章を以て成る長大論文であるが、紙面の都合上で省略に省略を加へて殆と五分一に縮約した、讀者願くは其心して讀まれよ

瀦水池認定河川法準用不當處分取消之訴願

村民連名

一、栃木縣告示第二百八十八號

左ノ河川及水面ハ明治廿九年法律第七十一號河川法第五條及明治三十二年勅令第四百四號ニ依リ河川法規ヲ準用ス

思川、二巴波川、三須戸川、四赤麻沼、五瀦水池

一、栃木縣令五十八號

明治四十一年七月栃木縣告示第二百八十八號ヲ以テ河川法ノ規定ヲ準用スヘキモノト認定シタル河川及水面ノ區域内ニ於テ數尺ニ圍繞ヲ現ニ工作物ヲ施設シ又ハ敷地ヲ占用セルモノハ本年九月十日迄ニ本縣ノ許可ヲ受クヘシ違背シタルモノハ拾圓以内ノ罰金若クハ拘留ニ處ス

一定の申立

栃木縣告示第二百八十八號を以て全縣下都賀郡谷中村舊谷中村、部屋村及野木村一部元谷中村堤内一圓を瀦水池とし之を明治廿九年法律第七十一號河川法第五條及明治三十二年勅令第四百四號に依り河川法の規定を準用すべきものと認定したると及之に栃木縣令第五十八號を適用するは不當の行政處分と確信す、因て此認定處分を取消し相當の裁決相成度候也

事實及理由

第一●●知事の認定は不當也●●●●●●●● 足尾銅山鑛毒流出して關東の沃野を不毛の地と化せしめんとして以來、人民の名若、志士の盡力に係らず、問題は未だ解決せず、而して谷中村は今や殆と問題の中心となれり、抑も栃木縣知事中山巳代藏が今縣告示第二百八十八號を以て、川其他の川沼と共に下都賀郡藤岡町、及野木村一部(元谷中村堤内全部)其他細小なる川々、水源なき淺沼と堤内宅地、田畑、原野、人民所有墓地、道路、溝渠及び瀦用水池等まで一圓を瀦水池とし、其河川及水面を明治廿九年法律第七十一號河川法第五條及明治三十二年勅令第四百四號に基き河川法規定を適用すべき區域なりと認定したるは果して其當を得たるものなりや否や左に少しく辯明せん

第二●●我國無比の沃土●●●●●● 瀦水池と認定せられたる元谷中村は我が國無比の肥沃なる耕地一千町に近き土地と堤内三百八十余戸の民家とを有し、數百年前より存する一大村落なりき、然るに今や人民四方に離散し離散蓬々として又昔日の觀無し、是れ實に去る三十五年元谷中村北方の堤防破壞してより今日に至るまで七ヶ年復舊工事をなさゞるに起因す、元來舊谷中村は群馬縣邑樂郡海老瀬村と隣接し兩地は舊と地理的水利水害の共通の干渉あり、一方の堤防破壞せば縣は直ちに之が復舊工事を爲すを慣例とせり、然るに栃木縣は三十五年舊谷中村堤防僅八十五間破壞せし以來此好慣例を打破し、該破堤を復舊すると稱して拾萬圓の工事費を縣より支出せしめ之を消費して破堤を修築せざるのみならず却て貳百貳拾間以上官權を以て破壞し、明治三十七年に至り舊谷中村破堤所より東西千間余の舊堤を削り落し、或は沿除の堤樹を伐り去り、數百間の堤塘を崩し、其石材を隣村なる赤麻村に賣却すると云ふに至りて民暴虐極まりと言ふべし、斯の如く縣は治水に谷中村を浸水せしめんとするに至りしは其裏面に深き秘術の存する所にして瀦水池の虚名によりて全村廢滅の陰謀は三十八年八月より漸く世人の眼にも顯著なるに至れり

第三●●奇怪なる矛盾●●●●●● 嚴く堤防工事を延ばし、千戈を交ゆるに當りては多く事業は遂に延せられて[illegible]り利根川河身改良の如き寸時も忽にすべからざる緊急の工事すら中止するの止なきに至られり、然るに斯る場合に係らず谷中村破壞の事業は着々歩を進め、工事費と稱して國庫より金廿二萬圓、栃木縣より金二十六萬圓、合計金五十八萬圓を支出し、内四十八萬圓を谷中村救濟と稱する名義に配當したり、時の内務大臣芳川顯正も國庫金貳拾萬圓は悉皆谷中人民救濟の爲にする旨を帝國議會に於て聲明せり、然るに事實は之に反して谷中村の買收となり、且つ其金額の大部分は賄賂と運動費とに使用し、其谷中村に利用せりと公表せらるゝ僅拾貳萬圓すら多くは斯の如く濫用したり、彼の谷中買收賄賂事件として當時の新聞に喧傳せられ栃木縣會議員等の紛擾の如きは實に能く此秘術を發きたる一例とすべし、斯くて村民救濟費は悪用して村落破壞費となせり、或は人民協力辛苦に成れる破堤修築工事を土木吏警官人足數十名にて破壞し去り、或は排水門を塞ぎ悪水を畑地に浸入せしめて麥作を妨害し、或は漁獵器を奪ふて生業を中止せしめ總に土地收用法を濫用し、且つ一千圓以上の時價を有する家屋も僅か百圓內外の移轉費を給せらるゝに過ぎず、又、人民自ら其住宅を破壞せざれば官吏自ら之を破壞して百圓內外の手數料を徵收し、田畑も亦た殆ど實價の十分一にて買收せられたり、村民は目下同法の裁判所に其曲直を爭へり、然も未だ判明せざれども行政處分の不當なるは火を見るより明かなり、而も此の如き事業は未曾有の[illegible]なる時機に計劃せらる、豈奇怪の事ならずや、人なる矛盾の行動に非ずや、而も之に加ふるに此支出の會計の不當なるは會計檢査院、帝國議會共に認むる所なり

第四●●忠民の悲惨●●●● 特に怙を三十七八年、日露戰爭に際し、谷中村の壯丁五十余名は出征して[illegible]せり、然るに此時にも彼等をして後顧の患なからしむるは全國一致、上下共に勉めたる際なるに、獨り谷中村は其範圍を脫し當局は彼等が出征中に特に其父母兄弟を離散せしめ、耕すに地なく、住するに家なき悲慘の境に陷らしめたり、彼等が遙々凱旋し一同孤立無事を祝せんとするに當り、悵かし三百八十戶の村家は悉く破壞せられ、一千町歩の沃野は茫々たる荒地となりぬ。

第五●●收用未だ完了せず●●●●●● 瀦水池が[illegible]なるは勿論、土地收用未だ完了せず、瀦水池の成立未だ明確ならざるに早くも河川法を適用せんとするは甚だ不當なり、例へば野木村の一部共有に屬する部分が舊谷中村の堤内に散在すれども未だ收用の手續を經ず、又、群馬縣邑樂郡海老瀬村の殘部六町余歩、舊谷中村に隣接せる栃木縣藤岡町字篠山等の傾斜地平地及び藤岡町字篠山の田茂呂多重の所有字七軒千三百七十五番畑地は現在谷中村の堤內にありて今尚ほ收用せず、夫れ此の如くなれば堤内一圓を收用して瀦水池と爲すは未だ到底容易の事に非ざる也、且つ堤内には如何なる大洪水にても浸水せざる民有地あり假に瀦水池を設くるとするも、此高地をも收用するの必要は斷じて存せず、而して此の如き土地は頗る多く其所有者を一々列擧するの暇無き程也、斯の如く、瀦水池の範圍未だ確定せざるに、收用未だ完了せざるに河川法及明治三十二年勅令第四百四號に依りて河川法を準用するは不當の甚だしきものなり。

第六●●瀦水池と河川法●● 假に一歩を讓り栃木縣認定の藤岡町及野木村一部(元谷中村堤内全部)を所謂瀦水池なりとするも此瀦水池なるものは[illegible]明治三十二年十月[illegible]縣令[illegible]を以て[illegible]するものと言ふ能はず、[illegible]何れも河川水流水面なる文字ある瀦水池なる文字を見出し能はず、土地收用法第二條に特に溜池なる文字存するも河川法及前記勅令には此の如き文字存せざるを以て、瀦水池に對し前記河川法及勅令を準用すべきものに非ず。

第七●●根本的治水●●●● 近時利根川改良渡良瀬川治水の水害が年々數甚しきに赴きつゝある實は天下の承認する所、而して年々の洪水期に際して其洪水氾濫の區域は[illegible]町村に跨りて谷中瀦水池の如き[illegible]何の效用かあらんに非ず、然らば斯の如き水害は何れより起れるか、思ふに、一は水源山林の濫伐より來り、一は關宿水道口の惡工事より來る、利根川の水源山中には近年鑛業者増加し、鑛山借區の數を増加せるが、是等の者は鑛業の名として實に山林を濫伐するを以て本來するものなり、關宿水道口の事は其由來を尋ぬれば三百年前に遡りて說明を要す、抑も利根川は古來其下流に及んで荒川と合して江戸灣に注ぎたるものなりしが、德川氏軍略上より之が方向を轉じ、東方なる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

渡良瀬川を横斷して鬼怒川の本流に合せしめ以て此大合流を銚子港に朝瀉せしめたり而して本來渡良瀬川(下流江戸川)の江戸灣に達する中途にある關宿水道口を狹め、以て水流を銚子港に轉せしむるに勉めたり、此水道口は舊形四拾間餘なりしを、二百五十年大平の間に何時しか二十七間となりて明治十三年に及べり、然るに驚くべし、今日は最も堅固なるセメント工事を以て其水道口僅かに九間内外に縮小せられたり、是れ抑も何に起因するぞ、事は餘に著大なり、即ち彼の足尾鑛毒問題の一朝世人の注意する所となるや、當事者の最も恐れしは鑛毒の都下に流入するの一事なりき、此に於てか敏捷なる鑛業者及其一味は秘密の計策により て何時しか此水道口を極端に縮小し、以て谷中村を中心として渡良瀬沿岸一體の地を鑛毒沈澱地たらしめたり、夫れ此の如く水源山林の荒廢と、水道口縮小との結果は實に怖るべき慘狀を現じ、近頃毎年の洪水に際し利根河水の逆流は渡良瀬河流域に汎濫して十二三里の上流に押し行き、其猛烈なる逆流が浸水町村を害するも甚だしきは毎年新聞紙の報導によるも明瞭なり、而も其被害の慘狀は年々激甚に趣きつゝあり、關東の一府五縣に跨れる沿岸人民が將來の運命を思へば眞に寒心すべきに非ずや、されば此大水害を治せんと欲せば、先づ關宿水道口を舊形に開鑿し更にそれより江戸灣に直瀉する新河口を開き、水源山林の培養に努め有害の鑛業を停止せざる可らず、然らば年々の大水害は自然に消滅し、從て谷中瀦水池の如きは一に貪慾者の暴戾を證する外、亦何等の意議を留めざる可し、國務鄕多論の折なれども希くは詳細御取調の上、公明なる御裁決あらんことを

明治四十一年九月十九日　惣代人　三名

内務大臣法學博士男爵平田東助殿

●手紙片々

▲田中正造翁より（谷中村）　谷中村、本十川縁きれならん、政府之縁切ならん、困た事、政府が土地收用法を以て亂暴しても個人の權利は動すべからず、立退を命ずる能はざるより別途河川法を持ち込んで又いじめる人民は曰く、我々此國を守らされば國土にびんせ、此人民にして此言あり、御憫みのほどを

▲伊藤證信氏より（鎌山）　益々御勇健主義之爲め御奮闘被爲在候趣、欣喜此事に候、新聞紙によれば虚無の靈光てふ石川氏御新著發賣禁止之趣御見舞申上候、氏近時之御思想伺ひ度ものに候

▲金子喜一氏より（北米）　御誌の御狀如何、アナーキーの御手さきとならずしてまつしぐらに女性開發のため奮されんことを望む、小生雜誌は別封にして送りますから御一讀を乞ふ、益々紙面を擴張して北米にての婦人問題のチャムピヨンたるを期して居ます

▲中野りう氏より（北海道）　世界婦人の爲め萬害を忍ばせられ、御奮闘遊され候段、感謝の至りに御座候、いさゝかわかりし私等、本誌によりて漸く自覺の城に進むを得、默容に遠き希望をたどり居り候。先生よ、此小暗き世の彼方に此處に此自覺の聲あるをきこしめし、日頃の御苦勞をいやされむことを神に祈り申候

▲神川まつ子氏より（廣島市）　秋風に思しげき頃と相成候よ、御變りも無御座候や、私事、相變らずますます大に食ひつゝ毎日〳〵ホゴ〳〵いたし居申候

▲安保萬作氏より（伊勢）　虚無の靈光發賣禁止の趣新紙にて拜承候、切齒の至りに御座候、數の多少に依て眞理は變ぜず社會を動かす原動力は常に少數者の手に在る事に候へば御祭ぶは益奮し中候得共益々御奮闘願上候

▲小野吉勝氏より（中込）　小生は本月初旬より寒冒の氣味で不快でした處去十五日水谷氏校葬以來ごつと臥床、未だに全快に至らず大に閉口して居ます、例の發賣禁止一件は其後どうなりましたか、次號に何か差しあげたいとおもじます、どうやら紙になりましたが病のため思ふに任せぬ御無沙汰、御免下さい

▲前田河廣一郎氏より（米國）　今の世、眞切に自己の使命を人道の一兵卒と思つて——基督の愛を蔵した近代人筋肉の發達した、胸の底に燃える物を待つた、頭の廣い革命者はそも幾何人ぞ、僕はツい此頃「革命家の革命」といふ事をかうさ思ひました、皮相な事はドウでも眞いが、實際革命は靈魂の底を揺り動かして來るが道、順此中金が出來たら石川兄へホイツトマンを送りませう、承知でせうが僕は米國の荒ぽい靈魂は救だと思ふ、今の世に、文明を隠れ、主義を脱し、富に淫せず、朴々として野な大奔する個人は尊び、僕の友達が云つたが、社會主義は多いが世に社會主義者はそう識かない。武點から曰ふても個性の發展は革命の機軸である樣です

●本紙の賣停發止

去月七日左の御達に接しましたが其後何等の御沙汰も無し、日々恟々として運命の時を行て居ます

世界婦人發行兼編輯　神崎順一

明治四十一年九月五日發行世界婦人第二十八號ハ新聞紙條例第三十三條違反ト認メ告發シタルニ付同條例第二十三條ニヨリ其發賣頒布ヲ停止シ假ニ之ヲ差押ヘ且最初ノ敵ト題スル記旨内務大臣ヨリ命令セラレタリ

右相達ス

明治四十一年九月七日　警視總監　龜井英三郎

汝理論よ

孤舟

汝！　理論よ
香なく　色なく　嗅味なく
毛皮　血肉　骨もなく
炎々　光々　心術の
浮々　蓬々の瓦斯の體

汝！　理論よ
萬有の長　汝若し去るか
山川大地　草木人獸虚無ならむ
あな奇しき　汝を忌怖すと
何故に　人たる事を罷めずある

聞け嗚呼の者
心的理論は　水の如
絶えず流れて進み行く
社會の精華　生命也
此所に溢れて彼所に決す
やむべしや……

聞け嗚呼の者
歷史に君が模範あり
秦の始皇が羸政事
學士を坑に　書籍灰に
狂愚は易し　鍬と燐寸

●毎月一回一日發行 東北評論 一部代價郵税共四錢

▲十部前金郵税共卅五錢廿部六十五錢▼

▽第三號（十月一日）要目△

●無政府主義を撲滅せよ……凡夫
●帝國主義とは何ぞや……高
●社會主義大意……堺利彦
●宗教改革の經濟的說明……高畠
●九月九日……長加部
●別辭三則……高畠
●小說『無神論者』……遠藤
●時評論……▲閥の財政方針▲稅金騷動▲煙毒問題▲御宮の東北行啓▲本誌の裁判沙汰▲秩序の爲に讃裁判官に同情す
●其他……短詩、和歌、俗謠、小品、評論社だより、判決文等にて、血あり、熱あり、興あり、味わり

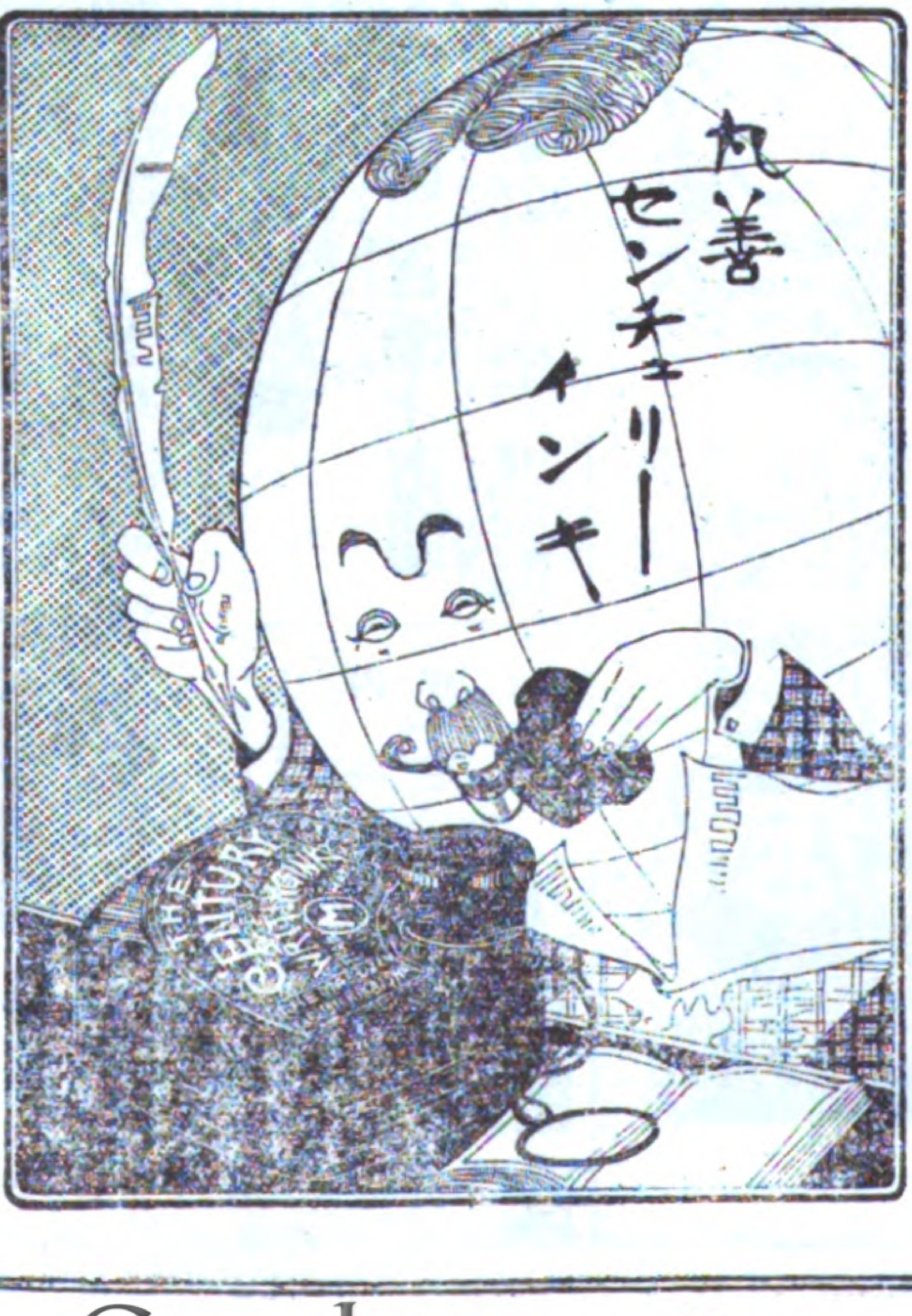
▽軟派乎硬派乎見誌上▽

▲必らず前金を要す……財政頗る窮也▼

發行所　高崎市柳川町十二　東北評論社

丸善インキを試みよ

其色澤の鮮麗なる其耐久質に富めるは毫も外國製と譲らず本邦製品の隨一也



東京、大坂、京都

丸善株式會社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の肌には殊に効驗著し

定價 大瓶 廿五錢 瓶入 十五錢 袋入 五錢 小袋 三錢 鑵入 十三錢

本舗 ライオン齒磨發賣元 東京神田柳原川岸 小林富次郎

十月一日發行 第二號

東京エコー

一部金十錢 十二部一圓十錢(郵税共)

最も奇抜にして趣味に富める雜誌は是也

▼黑岩周六氏は何故妻を離別せしや?
(黑岩周六氏は哲學的離縁をなし離別の模範を示せり!!)

▼桂内閣各大臣歴訪録 ▲小壯碁客血戰會

▼井上侯の血判狀 忠臣藏以來の連判狀!!!以て世の珍寶となすべし

◎妻君に頭の上らぬ後藤遞相の家庭

▼日本婦人用帽子懸賞大募集

▼藝者と役者兩『者』族の關係

▼明治百五十年の日本の變化を今より知れ 青柳有美

▼後藤男の人氣は何時まで繼續すべきや?

▼金が世を動かし實例で世を動かせ 金力は如何なる程度まで世を動かすべきや?

東京市京橋區有樂町三丁目一番地 有樂社 振替口座東京一〇六二六 二番 賣捌は全國各書林

自九月廿五日 至十月廿五日

天賞堂 秋季大賣出し

神田本店 横濱

◎御購求額 五圓に對して景品切手百圓宛廿枚 同じく二等景品五拾圓宛廿枚

◎御購求額 壹圓に對して景品切手廿圓宛廿枚 同じく二等景品拾圓宛廿枚

一本月は景品割合は本月廿五日の御新聞紙上に新聞各紙に広告致候あれ

涙紅醫院長 醫士 一瀨鷹一

一院 日本橋區蠣殻町二丁目十四番地
二院 神田區連雀町十八番地

學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又は無料

●齒科治療●

自午前八時 至午後六時

齒科醫 吉瀨才市郎

東京市神田須田町二十六番地

●學生勞働者諸君に限り藥價手術料共半額
●晝間執業者の便を計り夜間十時迄治療仕候

小兒科 內科 婦人科

每日 自午前八時 至午後六時

淺草區馬道町二丁目 小牧醫院

◎定價 ▲一部六錢●十部五十六錢●二十部壹圓一 ▲申込は總て前金の事

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 石川三四郎
印刷人 東京市牛込區　町三十一番地 井口正之
發行所 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 世界婦人
印刷所 東京市神田區表神保町四番地 博眞堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY